Oct. 1892
no. 329-2

女學雜誌

第三百二十九號

乙の巻

明治二十五年十月十五日發兌

注意

社説ウエスト女史の禁酒運動と題する者は其府下に於ける運動の當然の方案を講じ女史と其同志者との參考に供するものなり臨終の母ウイラードと題するは彼の世界婦人禁酒會長ウイラード女史が其母の臨終の有様を一々實際の儘に書きとめたるものにて驚くべく崇むべく學ぶべく悲しむべき事充滿せり、曰く死の床は最大の説教場なりと讀者一讀に價す家政欄內には諸氏の夫人に就きて實際の經驗法を聞き専ら卑近容易直ちに行ひ得可き有益の家政法を多く集む雜錄には今昔のものがたりの中面白き訓戒となり有益なる心得草となる實談を取り集めたり、吾宿の花は彌よ佳境に入り、時事欄內に孤兒院流行、孤女學院と監督ウイリアムス、伏姫、女學復興、等の諸項あり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 329. October 8th. 1892.

EDITORIAL :—Miss West's Temperance Work.

NOVEL :—Natsukusa.

CHILDREN'S COLUMN :—"The Flower of the Family."

MISCELLANEOUS :—Yesterday and To-day.

BIOGRAPHICAL :—"The Great Sunset (A Translation from Union Signal.)

CRITICAL NOTES :—"Shūkwa Shūsetsu." Wife of the Patriot Kusunoki.

FRAGMENTS :—Criminal Difference between the Sexes.

CURRENT EVENTS :—Orphan Asylum, a Sort of Epidemic. Bishop William and the Orphan Asylum for Girls. Revival of the Girls Education. "Fusehime." Japanese Women in Australia.

CONCERNING WOMEN :—

本號(第三百廿九號)目次

○社說　ウエスト女史禁酒運動
○小說　夏草
○兒藍　吾宿の花(若松しづ子)
○雜錄　今昔ものがたり(忙中の一閑)○過は人に嫁すべからず○諫に從ふ流るゝが如し○贋物の種類
○史傳　臨終の母ウイラード
○批評　荻花集說○楠公の夫人
○摘要　犯罪上男子と婦人との比較
○時事　孤兒學院流行○孤女學院と監督ウイリアムス○女學復興○伏姬○濠洲に於ける日本婦人
○女報
○問答　(山月子)
○孤兒之友　(蓄鋤子)

前週(第三百廿九號)白表

●社說　王佐論○總理大臣
●論說　處女の純潔を論ず(富山洞伏姬の一側の觀察)透谷子○本邦森林安固の度(齋藤乙作)
●批評　南白遺稿と江藤新平○大石良雄○史學普及雜誌
●雜錄　徒然艸に兼好法師を聞く(天知子)○近詠三首(米文卿)○人間の一大忘却(ふみ子)○社會の現狀。基督教徒の責任(山月子)
●片々　明治學院生○軍人救義會○靑年學會○東北救世軍○同志社通信○宮城基督教靑年會○英國の靑年會

前々週(第三百廿八號)赤表

●社說　世界婦人禁酒會頭の生母眠る。及其肖像
●講述　齒牙生理の大意(愛水生)
●小說　朝顏(菊地、御伽ぎ)手習屋の主人
●文藝　文學專門と云ふ事(みどり)○美人となる法○案山子の舍咏草
●雜錄　沙翁曲中の戀人(其二)○雨の夜(ひさご)○今とむかし(ふみ子)
●兒鑑　吾宿の花(若松しづ子)
●家政　主婦の秘訣一則(ふみ子)○家兎の飼方○黃金の砂二つ三つ
●摘要　女學生の產兒力
●批評　保羅の傳(山月子)
●女報
●附錄　孤兒之友

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百廿九號 明治二十五年十月十五日發兌

社説

ウエスト女史禁酒運動

毎週十數万部發行の雜誌に主筆となり、米國第一都出版同盟會の會長となり、合州國一州の禁酒會長となり、百忙身に迫る繁劇の身を挺きて、暫らく我國に遊説せんとて來られたるウエスト女史は、着後一週直ちに横濱にて働らき、六十の老ひの身を壯者に比して、直さま寒地北海道に渡り、兼て案ぜられたる通りの運動を畢えて、途に奥羽の野に叫び、今や再たび東京に歸らんとす、而して東京をもて其第一の目的とし、此處にて、花々しき運動を爲さんとするの計畫尋常ならず、同志者間の準備も亦大方ならずと聞きぬ。

吾黨は太たく之を祝して其趣構を歡迎すると共に、敢て一言を呈し、女史と其同志者との參考に供えんと欲するとあり。

つら〱、レビツト、アツケルマン兩女史來遊の跡に付きて考ふるに、其足跡深く印し、長く日本に其遺念を殘すべき事業亦成功せざりしにはあらねど、概するに驟雨を一時に下して廣く薄く草木を潤ほしたるか、又は一陣の風さと吹きて暫らくの間だ樹木を動かせしが如く、其影響一と時の間にして長く深く其感化を與へざりしとを憾まざるを得ず。而して、アツケルマン女史を以て、レビツト夫人に較ぶる時は、此憾一層深し。是れ其運動の餘りに花々しく、專ぱら廣告的のみに流れ、着實眞面目の用意乏しかりしに由る也。

因りて思へらく、ウエスト女史非尋常の好意を、亦同樣の運に托し、折角の大奮發を些々たる効驗の下に沒す可らずと。就て案ずるに、其運動法を質實にし、濃厚にし、寧ろ隱密にし、たゞ冷淡なる一般聽衆に公開演説を聞かせ、來客の多數を以て厚遇の言わけとなすが如き愚を止め、熱心にして眞面目なる少數の同志者を集めて、ウエスト女史に親炙熟交せしめ、以て其深刻なる感化を長久に遺すの工夫を取るべし。然らずして、女史を公開演説場にのみ引廻すは、女史をして雜兵又は下士官の役を爲さしむるもの也。一軍の大將を歡迎して、其働らき方に世話するの法を得たりと云ふ可らざる也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

下男下女召使ひ方

ふみ子

婢僕を召使ふ心得方の、大切なるとは、誰しも心得させ玉ふ事にて、今更事新らしく、申迄もなけれ共、何卒主婦たらむ人は、須臾も、あれも人の子てふ觀念をば、忘れ玉ふ可らず。主人よりこそ、賤しきものとも見め、其親々の心に取りては、假令如何程愚なるもの又は甚しき不具者にても、黄金にも、玉にも替へ難きはおろか、己が身よりも、いとをしきものに思へるが普通の情なれば、其を手離して、他家へ仕へさする心の中は、並大抵の事には非るべし。されば主婦たるものは、或る意味に於ては、婢僕の親ともなり、又は教師ともなりて、單に彼を召使ふのみならず、之れが保護者、敎育者ともならでは、叶ふ間敷となり。されば常に婢僕をも、家族の壹人と見倣して、何事にも懸隔を置かず、成るべく彼に同情を與へて、而して又彼よりも、眞情を呈せしむるやう、爲すが肝要なり。(さりとて餘りに馴れ近付て、禮節を欠かしむるやうの事をいふに非ず)婢僕を單に奴隷視せし昔なりとて心得ある人々は尙ほ之れを奴隷視せしには非ず。今人も及び難き恩愛を施して、あれも人の子てふ想をば、充分に實行したるなり。況んや今日は、人の上に人なく、人の下に人なき四民平等なる時世となりて、人が人を、奴隷として召使ふべき權利はなく、只傭ひし者と、傭はれし者との間に於て、命令と、仕事とが約束によりて成立つのみなるをや。されば切に之れを賤しめ、輕んずる心を去りて、人間としては同等のものなるとを記臆し玉ひ、同情の念を、持ち玉ふこそ、至當ならめ。昔の婦人にても隨分心得たる人々あり徳川二代將軍の頃にやありけむ。佐竹右京太夫といへる士あり、或る御禮日の挨拶にとて、お城より老母方へ參りけるに、折ふし來客あり、老母侍女に命じてお客樣へ何ぞ進じ候樣にとて御膳を出さしめしに、右京傍に在り、是へも膳持參り候やうと申き、老母之れを聞きて、御自分の供の者は、支度いたし候やいかゞと相尋しに、未だ支度致さずと答ふ、老母早々供の者に支度致させよと侍女に命じたるに、其内右京の前へ、膳持出たり。右京は蓋をも取らず、只俯伏して居たりし故、居合せし客右京に向

ひ御膳參り候やうに候と、いひけれ共、右京は猶俯伏したるまゝ答へず。客倘ほ重ねていはんとせし時、老母申けるには、彼は心得方恐しく候ほどに、得喰べ申間敷候、彼はだとへ登城致し候共、家來よりは、遲く起て、遲く支度を致し、罷出候に、家來は右京よりも、早く起き、早く支度を爲し、供に立ち候事にて候、殊に常に右京に、命をも呉置候ものなるに、夫にも氣付ず、自分のみ膳を持來れと申候段、不心掛なる事にて候、お搆なくお客人は、召上られ候やうといひしかば、遂に右京は、侍女が再び來りて、お供の支度いたし候と申出るまで、箸を得取らざれしとぞ、世の奥様方如何思召し玉うぞや、何處の家にても、來客の爲め、夕飯の後るゝ事などは、隨分有り勝の事にて候が、其時婢僕は奔走の命に疲れ、奥様は同じ事にても、上にて指揮し玉ふのみなれば、幾分か空腹を告るとも婢僕よりは遲かるべきに、あゝ遲くなつたとて、婢僕に搆はず、前に寛々御飯を始め玉ふ方もあり、又は俄の客來にて、御飯の足らざるやう成し時、足らねばお前炊てお喰べとて、下女の空腹に搆はず、お自分ばかり、ムシヤ〳〵と召し上がる方も、間々なきにしも非るやうなり。

かゝることは、些細な事のやうなれ共、洵に注意すべきことと思ふまゝに、序ながら記しぬ。

茶話會

○人を迎ふる季節のよ

或る老人の物語りに、四月十月など、衣更へする季節には、儀式張りたる祝ひ事など、延して苦しからぬは、延したるが善し、其は何故となれば、凡そ男女に限らず、袷の紋付とては、餘り準備せぬもの故、かゝる際に人より招かるれば、斷はるは惡し、行くには衣類差閊ゆるとて、急に小袖の綿を拔くもあり、兎角に、仰々しく、ぞうさに思ふもの故、其邊も心得べき事なりとぞいはれし、實に一理ある言にこそ。

○家の修覆

破損を加ふるに、急ぐべきは、屋根の漏り、竹椽の朽ちたる庇の危きなど、惣じて人の過ちのあるべき所をば、暫時も捨置ず直したるが能きと、是亦古老のはなし

○經濟的人物の鑒識方

或る金貸しの話しにわれ、人に金を貸さんとするには、先づ其人の、煙草の吹ひ方に、注意して、而して後ち、貸すべきか、否やを判定するなり、其は煙草の吹殼を見るに、殘りなく灰になしたると半ほど吹ひてまだ、煙草の幾分かゝ、殘り居れるに、其儘打捨るものとあり。此後者の如きは、不經濟の一端を示すものにて、概ね小心勤勉の人に非るべければ、金を返濟すると六か敷なり、故に斯の如き人には、成るべく貸金を謝絶するなり。此方法に依りて、幾年か、人物を鑒識し來りしに、當らずと雖も、遠からざりきといへり。實に人は、其人の議論を聞き、若くは大事に對する、行爲を見るよりも、自他共に注意を怠れる、些細の所作に依りて、却て本質を、發見せらるゝものなり、出入の際に於る戸障の開閉やう、又は靴下駄などの脫ぎやうなどにても、其性情の一端は知らるゝなり、心すべきことにこそ。

○食物の腐敗を防ぐ一法

是からは、追々寒く成り升から、食物の腐れることも、少くなりて、奥樣方には、餘程おらくに成り升が、暑い時分には隨分困るとで、好々注意致さねばならぬ事です。時分柄少し後れたお話しの樣ですが來年の爲に、（鬼は笑ふても、家事に注意し給ふ方樣は笑ひ給ふな）申上て置升う、扨煮燒したものを貯へ升には、其器物を淸潔にするとが、餘程肝要と思はれ升。其は器物に、不潔なものが、附着して居り升れば、空氣中に在る黴菌が、直に其處に來りて、忽ちに繁殖の便利を得升からの事で、此黴菌と申升ものは實に恐るべきほど、繁殖の速かなるものです、而して之れが、ものを腐敗に導く主因なので御座り升から、成るべく空氣に觸れしめぬやうに致すは勿論、器物を出來る丈、淸くするとが、大切でムり升。さて其器物を淸潔にするには、種々方法も御座り升うが、先づ簡便なる方法は、飮食物を盛るに當り、熱き湯にて其器の內部を能く洗ひ、又熱き湯にて絞りたる布片にて之れを拭ひ而して後ち用うる事です。一々斯の如くして用ひ升れば、腐敗を來すとが、餘程違う御座り升。

○湯煮の事

磁器や硝子の器を用ひ升には、昔より湯煮と申升て、一旦煮てから、用うる事になつて居り升が、是は只無暗に、煮る斗りでは、何の功能もない事です、其方法は、矢張水の時よりし

て其煮るべき器物を釜中に入れ、徐々に其湯を熱く致して、而して又徐々に之れを、放冷すべきとです、さう致し升ぬと、器物の分子が、不正に膨脹して、又不正に收縮し升から、矢張破碎を來し易いで御坐り升。

○日々のお菜

女學生が、始しめ主婦となり升た時、一番に當惑するのは、日々のお菜です、或新婦は、學校に於ける試驗の問題よりも六かしいと申され升た、成程他人の賄にて食べて居り升時には、是ではいかん、あれでもわるいと、いろ〳〵小言を申升が、さて自分が、主任者となつて見升ると、どうも家内中の氣に入つて、そして費用のかゝらぬやうに、致すとは困難で有り升、けれ共それを致すのが、主婦の手際で御坐り升から、其處は種々、工夫致して見ねば、ならぬ事です。扨夫には、いろ〳〵料理法を書き升た書物なども御坐り升が、書物にては其通り參らぬ事もあり、又いろ〳〵手數の掛るとが多いやうで御坐り升。夫故矢張是は、經驗ある老人にいろ〳〵話しを聞く事といたして、書物上の方法と、折衷いたして、夫れに自分の工夫を加へて、いろ〳〵試みねばなり升ぬ。そして平素始終心掛て居て、他家へ參りたる時、饗應に預れば、能く其調理法に注意して、珍らしきものは之れを尋ね置など致し升れば、其內追々慣れて參り升、兎に角お菜は何でもないやうよにして皆の氣に入るやうに致すのは、隨分六かしいものであり升から、平素餘程注意して置ねばなり升ぬ。夫から今一ツお菜に就て、注意すべきとは、兎角自分の好きなものは、度々思ひ付ひて嫌いなものには、頓と氣の注ぬ一事で御坐り升、自分は假令嫌いでも、人の好くものは、澤山御坐り升から、先づ此週間のお菜は、何に仕やうかと考へ出す時に、自分といふ心は毛頭持たず、此頃は魚類は、何が澤山獲れるものか、野菜は、何が時候に適したるもの乎と、夫等の問題より考へ始め、而して前週は、何々を用ひたる乎を考へ。餘り同じのものゝみを度々續けぬやうにし。そして自分の嫌ひなお菜は、殊に注意して、鹽梅を試みませぬと。さらでも、嫌いなものの料理は、誰でも不得手勝なもので御坐り升から他の人々の、氣に入るやうには、出來にくきものであり升。又下婢などに、打任せて置升と、主婦が喰ぬといふに心をゆるし、つい〳〵麁相な仕方に、ならぬとも申ませぬから、自

分の嫌ひなもの丶料理は、一層意を付けねば、ならぬと思ひ升。其他は、いづれ又おい〳〵に。

○子供の着もの

子供に、風邪をひかさぬやうにとて、薄着をさせぬ事は、皆さんのよく爲さる事で御坐り升が、夫よりも注意すべきとは、濕つたものを、身に着させて置かぬ事です。是は薄着よりも、もつと小供の害になる事で、風邪も是からひく事が多いでムい升。夫故成るべく注意して、小便に汚れたり、又は他の關係にて濕つて居り升ものは、少時の間も、身躰に附着させて置ぬやうに、注意せねばなり升ぬ。

○干飯の拵へやう

飯櫃より、洗ひ落せし飯粒を干飯となすに、竹の皮などに載て、日光の照る處に置き、乾す人もあれど、夫にては鳥がせゝつたり、又は猫が踏んだりして甚不潔になる虞があり升から、夫よりも、飯粒を平たき皿に受けて、成るべく水分を滴らせ、いつも火鉢にかけ置く處の藥罐か鐵瓶の蓋を除きて、其口に載せ置けば、いつの間にやら湯氣にて乾き、光澤ある能き干飯となり升。

○手筥の紙捻

手筥の中には、强ち秘密と申ほどでなくとも、散亂して人に見らるゝは、餘り好ましからぬものがあり升。是等のものは、無暗に引裂きて捨る人があり升が、夫れは甚無益な事で、紙を只捨て仕舞ふ事になり升から、夫よりも同じくは之れを適宜の幅に剪刀にて切り置き、閑暇の節少しつゝにても紙捻となし置く時は、急に紙捻の有用な時の間にも合ひ、又一方には、廢物利用の、一端ともなるです。

○人に忠言を進むるの方法

古より、諫言耳に逆ひ、良藥口に苦しといふ。兎角忠言といふものは、之れを進むる時能き感を、人には與へぬものであり升。そして又其忠告の致し方に依りては、切角の眞情も却て先方にあしくとられ、其効のなきのみならず、害を醸すことがあるものです。故に忠言を進めむとするには、先づ自分が先方の人に親切なと、信じられ居るや否やを省み、然る上にて言ひ出すを好しと致し升。何人にても、自分の爲めあしき事はいはぬ人なりとまでに信じさせたる上にて申出せば、惡感情をも起させず、大概は忠告の効を奏するとと思ひます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家庭の養鷄（四）

抱卵法及び巣鷄の取扱（下）

（一）抱卵　は巣鷄の外へ出でたる時、温度を平均に受る樣、端にある卵を眞中にし彼是其位置を取換ふべし。又種卵の冷へざる樣にケット、フランチル等の切れにて覆ひ置べし。又抱卵せし日より四五日を經て種卵を光線に透し覿るべし、透明なるものは活卵、不透明なるは死卵なれば之を取去るべし。又孵化の四五日前に卵を二三分間程も微温湯に入るれば活卵は動搖すべし、斯くすれば孵化力を大に助くるとあるべし。然し始めての人は色々工夫をせず、失張り自然に任かする方却て安全なり。

（二）孵化期　は家鷄なれば廿一二日間、鶩なれば廿八九日間に必ず孵化す。其時は殊に注意し、孵殼を破りて出づるの力なきものは、少しく人力を加ふるも、餘り手を入れ過ぎれば却て雛を不具にすべし。又脫殼は一晝夜間程に殘らず化るものなるが、母鷄は兎角首めに脫殼せし雛を外へ連れ出ださんとする故、之を外に出さゝる樣すべし。然らざれば未だ孵せざる卵を其儘冷却せしむべし。脫殼せし雛は全躰委く濡れて居り、一晝夜程は食を喰はずして、母鷄の羽の下に眠る也、此間に未だ脫殼せざるものを脫殼せしむる樣すべし。

以上は孵化法の大畧なり是より說くべき、續坐法は、一羽の巣鷄に、二回或は三回まで孵化せしむる法にして、巣鷄の乏しき時、甚だ便利なり。是を行ふには、同時に二羽以上の巣鷄を得ざるべからず、又成べく巣念の强きものを擇ぶべし。

續坐法

（一）續座　は引續き孵化せしむる意味なり、續座は甲の巣念强き母鷄の孵化せし、雛を乙の巣念弱き母鷄に托するにあり。甲の雛を乙の母鷄に移すとは、成べく夜中に行ふべし、其際甲の母鷄に成だけ雛の鳴き聲を聞かせざる樣、乙の塒を成べて隔て置べし。

（二）抱卵　は甲の巣鷄の雛を取り去るや、直に新種卵を抱かしむべし、其后兩三日を經て巣鷄の安心したる頃、巣床の敷藁を委く取換ふべし、然らざれば兎角羽蝨生じ易く、一度生ずれば、折角孵化せし雛も健康に成長すると難かるべし、能く注意すべきなり、又巣鷄には滋養のものを與へ、取わけ青菜を欠くべからず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小說

朝顏

母の病（三回）

手習屋主人

三年の月日は立ちて卒業試驗の近づく頃なりき、母よりの音便に病に臥して日に重れば試驗の終るや直ちに歸り來べしとあり。此度の試驗にはすぐれたるもの十八人を擇りて大學校へ入らすることにしあれば我はあらん限りの力を極めて此よろこばしき沙汰を母の許へもたらし歸らんと思ひけれども其を待つ暇なく五月の初の日我は一個のカパンと一つの行李とを携へて船に乘り込みぬ。

我は三年の間母の許へ月毎に二たび音便して恙なきやを問ひつ又我が如何にして暮らせる如何なる課目を學びつゝある杯用なきこと迄も精しく知らせぬ。其文と共に必ず一通づゝ房子に宛てたるを贈りけるに彼も亦必ず其返信をおこせしが其言葉の中には自から彼れのやさしき人と爲りあらはれて世に大なる詩人の筆にも及ばぬと思はるゝほどの怪しき力を持てるともありし。彼が今年の春よりの音便には頻りに心細き言葉のみ見へたるがこは何故にや心ありげにて我が耳には何とも聞き得ざりき――大波の音檣の末を過ぐる凄まじき風の音のみ聞き馴れにし我が耳には。

三日目の夕まぐれ家に着きぬ。行李などは其處に置きて先づ母上の臥し玉ふ所へ導けと」老ひたる婢に向ひて言ひぬ。彼が唐紙を明けたるとき帽子を其處に脱ぎ捨て手套をはづしつゝ間の中を横目見れば美くしき處女の枕邊に坐はりてありし。誰ならんと思ひしに入りて見ればこは房子にて彼は早ダンスに髮を束ねたり。母の面影を見るより我は打ち泣れぬ。麻の如き白髮は心使ひのわざにや處〳〵交りて打ち亂れ咳拂ひすることの苦るしげなる顏の皺みたるを見て涙をさへ兼ねて言葉もなかりし。母も涙を浮べ房子に手にて敎ふれば彼は我を立たせて隣りの間に來て病の起りより日々の熱の度脈の數より醫の敎へたること共總べて精しく語り聞かせ又餘り甚しく氣遣ふには及ばぬように聞きたれば心を休めよと告げぬ。我が家に歸たりと聞きて舊き友又は父が門人など訪ひ來りて

老ひたる人などは我が爲めにいろ〳〵と言葉多く親切めきてうるさき迄に我が爲めに計る。されどこは笑ふべきことにはあらで今母が言葉をも失はぬ前にくさ〳〵問ひ置くべきことなりと房子は教へぬ。

我は片時も離れずして母が枕邊にのみありて房子も亦大かた日々來たりて病を問ひし。

かくて一週りを經たるころ母の病は大に怠りければ我は知邊の人々を尋ねなどし又佐賀町に住める昔し我家に仕へしまめやかなる老人あれば其許に行きて樣々の骨折りを謝し又永らく我れ都に止まることを得ずして水無月の中ごろ永き船路に出づることもあるべければ後に若し母の病の再び重りてなき人とならん日には跡の事を盡く彼れに打ち委ねんことを賴むなど我が馴れぬ事のみを爲るに暇なかりき。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

夕月夜（四回）

「今日は遲くなりたれども今より父上の墓に參り且君が許を尋ねん」。「されば我も共に行くべし」と房子いひぬ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「この寺の裏庭の中に住持が母なる尼の來りて住めり其人は和歌と琴の巧みなれば去年の秋より我は師と賴みて二つを學ぶ。この日頃永く尋ぬる暇なくて怠り居ぬ。今日はついでなれば立ち寄るべし君も來て見玉へこは我が親しき友なりと云ひて引き合せん。」

この妙圓寺と云ふは昔し某の大臣の建てたりと云ひ傳ふる古き寺にて庭などはいみじく廣く盡く櫻を植ゑたり。

住持は我が幼きより知る人なれば遇ひて暫らく相語りて後尼が庵の前に來て見れば明り障子少しく明けて佛の前に香を焚き鐘うち鳴らし夕のつとめをせり。庵の後の方に行けば淸き泉の水の流れて苔の色靑し。春も老ひ櫻は何れも色さめて白し。傘の如く廣がりたる松の下に立つ石佛あり黑くさびて所々苔むしたり。房子その前に立ち掌を合せて拜みぬ。我も故に拜ぬ。房子奇しげに打ながめて微笑み「何事を願ひ玉ふ?。」本堂にて僧どもの經よむ音木魚の音は最早打ち止みて泉の流るゝ音尼が經よむ聲靜かなる耳に入りて石佛の後なる腰掛に倚り心をひそめて之を聞き居たるに房子も傍らに倚りて「何事を願ひ玉ひし?」と又思ひ付きて問ふ。其さまいとあいだれたり幼き時につゆ換らぬ我妹なりと思ひて彼を見て打ち笑ひ

しに彼、わざと貌を作り首を垂れて物をも言はず其姿をぞそかに大理石の女神のように見へたるが耐へ得で亦笑ひぬ。こは彼れが古き友に向ひて限なき喜びを思はず現はせしものならんか。

驟かに彼は容をあらためて云ふ「我はまことに憂き事の數々積りて問ひ計らんとする人もなく如何にせんとのみ思ひ居たりし」。「そは何事にや聞せ玉へ。此頃の君が文を見て悲しげなる言葉多きは何故ならんと怪しみ居たりし」。暫し口を閉ぢてありしが「我は何事をも君を力と頼むほどに必ず我が身方になりてよ」。「そは憂ひ玉ふな。君が爲めにとあれば身をすてゝも」。「されど。されどともすれば君も頼まれじと思ふ。………君をしも頼まれぬ時は又如何にすべきか」。何をか思ひ出でしと見へて涙を拭ひ「ア、我れ何なげくらん。その時は此身死ぬ計りよ」。思ふに彼は胸の中に限りなき憂ひを包みて之を慰められんとを求むるならんか。此春の頃よりは我が心悲しきとのみなるを知らで。されど我は如何に之を慰めんか。

尼はつとめを終りて此方に來ると見ゆれば我は去りて叢立つ呉竹の陰に立ちぬ。尼は房子が傍に來て「御身は知らぬ間に此處に來て居玉ひぬ。如何にして左樣に歎げき玉ふぞ。かゝる春の暮の夕月夜に思ひ出さるゝ事もありてか?。尼に精しく事の由を告げ玉はゞ頼もしき相談相手ともならんものを。この花の如く美はしくやさしき乙女の心を惱ます者は何處にあるならん。されどもかく火の如く燃ゆるものは又日ならずして打ち消えん。一時の心の迷ひなれば斯ることに心を痛めずして速かに家に歸へりて靜かなる眠りに就き玉へよ父母も待ち居玉ふあらん。我は日頃風をやみて快よからねば今宵は藥を服して早く眠りに就かんと思ふ」と云ひて入りぬ。

彼はなほ泣ひじやくりつゝ涙を拭ひて居たり。我は立寄りて「房子。さらば歸らん」。又尼君の出で來るやも計られじ。まだ我もしばらく家に止まる事にしあれば君が心掛りなるとどもゆる／＼と打ち聞く折あらん」とて立たせたるに彼がショールの上などに櫻の花瓣白く散りかゝりたれば拂ひ落として髮にかゝれるをも取り捨てぬ。

先にくもり居たる村雲は去りて月は現れぬ。我等は寺の裏門より出でゝ浦田の畔を越てあなたに見ゆる彼が家に行きぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒藍

吾か宿の花

第七回

若松しづ子

さて翌日になつて、子供たちが前夜不審に思つた例の手紙のとは聞立をしてもむだといふとが分り升た。叔父から來た書面だといふ丈は言ひ聞かされ升たが、それ切で何の用事とも知れませんかつた。併しルーセの病氣は其日から少しづゝ好い方に向ひ升た。父の額にあつた心遣の黑雲が薄らいだのと母の淋しげな微笑に何となく威勢の出て來たのとを見て、ルーセは其譯を聞かぬ中に、はや心の重荷の下りた心地が致し升て、嬉敷さうな顏色を見る兩親も自分も全快したのかと疑ふ樣でした。併しこれは暫時の氣休めで、咳の續いて出る處では病の根本が依然として元のまゝで有つた證據でした。かれこれする中にホイッテヤ氏（叔父の名）よりの手紙はますます繁くなり升て、娘も漸々快愈に趣けば、何れ近日參上、久々にて拜眉を得べく申越し升た。此書面は子供等に讀み聞かせられ升て、子供たちは本當の叔父樣を見るはこれが始めてだと大悦びに悦び升た。

或夜家内の人々は大きい松の木の卓を取りまいて、思ひ〳〵に書物を讀んだり、仕事をしたり、話したりして居升た。手製の粗末な蠟燭が卓の上にこゝかしこと立てゝ御座い升たが僅かに其最寄〳〵を明るくする計りで、室内は薄暗がりでした、併し大きな爐邊に盛んに火が燃へて居た爲に并み居た血氣盛んな幼な顏をてらし升た。今しがた焚木を積み直したアーサは、

かふいふのは火といつても恥敷ないネ。御覽なさい、ほのほがまだ火のつかない冷度槇にからんで抱き〆るよ！、

詩の思想の一向にない姉娘のリベカは不審顏に、

抱くなんてどふして分り升の、ダケド、アーサさんはいつでも可笑敷と斗りいつて入つしやるからネ。

アーサは笑ひながら

それは僕の智慧で分るんです。そら、また聞いて居て御覽なさいよ、槇どもがほのほに聞せようといつて歌を歌つて互の友誼を感謝して居るでは有ませんか？

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

そんなよが聞こえるもんですか、あなたゞつて聞こえないんですは。

スルト、ハテが

あたしなんか燃して呉れる友だち、ちつとも有難くないは

今まで靜かに火を見つめて居たトムは

アーサ叔父さんが來たら賑やかでせうね、おつかさま、アーーサ兄さんは叔父さんに名を貰つたの？、

ハテは母に魁けして、

ナアニサ、祖父樣の名を貰つたんですよ。

聞いて、トムが

おつかさまにおとつさまが有つたなんて御笑いナ。

ハテは直ぐと揚足をとつて、

おとつさまがないとすれば倘と御笑いは。アー／＼此縫目の長いと！、ルーセさんはどこまで縫つて？モウおしまいネ、どふも早いと／＼

ルーセはニッコリして、又縫ひ始めて、咳に妨げられて、一寸止り升た。スルト母が

ルーセさん、モウいけませんよ、さう咳をする中はかゞんで、仕事をさせて置けませんから、

それじや、かふ眞直ぐに坐りませう。

いゝへ、矢張り、いけませんよ、サア、こつちへおよこしなさい、病氣がよくなつてから又して下さい。

デスガネ、おつかさま、まだ此冬は仕事が澤山あり升に、モウ二月になり升よ、わたしまでがヂットしてなまけて居りましたら、いつ用がおしまいになりませうえ？

リベカが

冬もまだ半分殘つて升よ、「カンドルマスには樵も半分、馬草も半分」といふとか有るじや有りませんか？

併し仕事は半分になりませんネ、

とはハテのいつたとでした。ハテのいふとを取り違へたリベカ、は

アレ、仕事も半分と入れたかつたでせうが、這入らなかつたのですはネ、

又しても姉さまののろまがといふ顔で、ハテが

姉さんなにかはどうま違つても、世を驚ろかすといふ樣なとは出來ないネ、

リベカ、靜かな調子で、
そんな事は出來てもしませんわ。
併しリベカさんに心を燃やさせられた人が一人有り升よ。
とアヽサがいひ升た。
姉さんジヤン、ワライトさんが姉さんほどの美人は知ないといゝ升と。
ジヤン、ワライトの申條を聞いて、子供たちは一同笑い升た。リベカ一人が默して、間がわるさうでした。暫らくして、
誰がジヤン、ワライトなんぞにかまふもんですか
一同はまたドツト笑ひ出し升た。ルーセはアーサの顏を見擧げて、笑いながら、頭をふつて、
およしなさいよ。
アーサもホヽ笑みながら頭をふつて、
ジヤア、よしませう。
二三分過ぎて、又上を見、
ルーセさん一寸此算術の問題を見て頂戴な。
ルーセは卓を週つて、アーサの方へ行き升と、アーサは自分の椅子を半分姉に頒ち升た。アーサが前なる石版に何か書いたと見て、肩越しに讀み升と、「ジヤン、ワライトはルーセさんがおつかないつていひ升た。」と書いて有升た。それで、笑いながら、「さうでせうとも、あたしは鬼ですもの。」と書升た。
でも、ルーセさん、あなた、あの人が來ても、何とも仰しやらないじや有ませんか、
あたしの方でおつかないからですよ。
アーサは冗談は措いて、六敷問題の說明を聞き始め升た。
アーサさんの理解の早いこと!
ルーセさんの說明の上手だこと、おつかさん、ルーセ姉さんは好い先生になり升ナイ?
とアーサがいふと、母は
何より先へ身體を丈夫にしなければなりませんよ。
此時トムは戶の方へ走りつゝ
誰か來升たよ。
アーサは小聲に
又ジヤン、ワライトでも來たんだらう。
然るにトムが案内して家に入れた人を一目見ると、母は非常

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

も、亦詩歌、繪畫、文章などの、美術思想を貯へ置くも、終練上大に効益あるとなり。昔より武人にして、文事を兼ね、強敵と、金皷相見ゆるの際に於て、悠々思想を詩歌の上に、及ぼしたるなどは、如何に優しき擧動ならずや。百世の下其人を想見するにも、假令ば激戰の最中に於て、梅花を手折りて、箙に簪したりといはゞ、如何に其武者振りの一段うち上りて覺へらるゝや。安部貞任は、衣川の城にて、八幡太郎義家に追迫られ、既に危く見へたる時、義家は、きたなくも敵に後を見する哉、いでものいけんとて

衣のたてはほころびにけり。といひかけるに、貞任はしころ振向けて

年をへし、糸のみだれの、くるしさに。と付たりければ、

義家優しき敵の、心かなとて、遂にはけたる箭を作し、追はでぞ止みけるとぞ。又下りての世に、細川藤孝某地の戰に、敵の馬を棄て、逃ぐるを追ひ、及ばずして引返しけるに、從者誦むるに

君はまだ、遠くはゆかじ、我袖の、袂の涙、ひへしはてねば。その古歌を以てし、馬の背猶暖なれば、敵の行く事必遠からじとて、再び藤孝の馬首を轉ぜしめ、以て敵の首を獲せしめたるが如き、又上杉氏軍を下總に出さんとせし時、山際の海邊にて立止り、潮たゝへたらば、通り難かるべし、如何ならむといひしに、折ふし夜半ばかりなるに、太田持資道灌進み出、拙者見來り候はむとて、馬を乘出したるが、須臾にして立歸り、潮は干たりとて、軍を進めけり。是は古歌の

遠くなり、近くなる海の濱千鳥なく音に潮の、滿ち干をぞしる。とあるを思ひ出で。千鳥音の遠く聞へたるを以て、潮の干たるを知りしなり。又退き口に、利根川を渡る時、是も夜中にて、暗さはくらし、何處か淺瀬ならむとて、人々口々に騒ぎあへりしに、持資

そこゐなき、淵やはさわぐ、山川の、淺き瀬にこそ、あた波はたて。と詠める歌あれば、波の音荒き處を渡せやとて、難なく川を渡りしとぞ。

○過は人に嫁すべからず

土居大炊頭といへりし人、七所紋の小袖を着し登城せしに、染違へて、一所落し有しを、大炊頭も心付ず。城中にて出逢ひし人、御紋違ひぬといひ知らせければ、驚きて着替へ

ぬ。供の人歸りて、さてしか〳〵なりきと家老に告ぐ。家老は、納戸役の麁忽なれども、其役人を先づ蟄居させ、二三日を經て、納戸役の不調法、如何計らひ申べきと、大炊頭に尋ねければ。大炊頭いへるやう、我も夫れを心付ぬにてはなけれど、扨爰に、仕にくき事一つあり。先づ納戸役の疎そか、紺屋の不念、仕立屋の不調法、是皆咎め方もあらむ。されど一ッ爲し難き事は、我の不念、着ながら心付ず登城せし段は如何なさん。之を思ふに納戸役のみの不念に非ず蟄居を免すべしとて、何れにも咎めはかりしとぞ。

色の黒く見ゆるは、鏡の咎よとて、罪なき鏡を抛ち玉ふ、令孃は擱ぬ。旦那の手前、咎を下女に嫁して、其責を免れむとし玉ふ奧樣がた、大炊頭とはいかゞ〳〵。

○諫に從ふ流るゝが如し

池田新太郎光政といへるは、備藩中興の君主にて、賢名世に隱れなかりし人なり。或る夜お菓子に、密柑を召寄せ玉ひしに、鹽見玄三といふ士傍にあり、公に申上げるやうは、夜中冷へものを召し上るは、然るべからずと、光政則ち密柑を喰べ玉ふヿを止め、暫くありて奥へ入り玉ふ。獨言して、扨てあぶなき事をと仰らる。年寄女中承りて、如何なる事かあらせられつると、伺ひけるに。いやとよ、今玄三が、しか〳〵の事を申せしを、夫程の事、予も存じ居るわと、既に口先へ出んとせしが、あわ能く、言はでこそ止みぬ。若ししかいひたらんには、此后誰れか予が爲に、諫を進むるものやあるべきと。

詩經に、非女之爲美。美人之貽。といへるヿあり。されば人若し、他より忠告を受けたらむには、假令其言は、未だ自分を滿足さするほど、大切あるヿに非ずとも、其忠告せし心は、飽く迄も美しき、厚意に出たるものなるかを思ひ、深く之れを謝して、後々の爲め、猶忠告を納るべき道を、存し置べき事にこそ。

○贋物の種類

是も同じ君の話しなるが、嘗て京都より、三宅大道といへる儒者を召し寄せ、祿を與へて傍に侍せしめらる。或夕此儒者に問はせ玉ふやう、此頃京都にては、如何なる事かあると。大道申けるやう、京極黄門の書法を贋するもの候て、眞蹟と價を同う致し、大に人を欺き申候、さて〳〵憎むべきヿの至

にて候と。光政少時沈吟して仰らるゝやう、いやとよ夫れは、必しも人を害するとには非ず、予が憎む所は、奸臣の智を賣りて人を欺き、祿を盗むなど、是は賢者の贋ならずや、利口の邦家を覆すは、今に始めぬ事なり、予が國にもかゝる類あらむ乎と、常に恐るゝ所なりと。

今の明治の聖代には、かゝる類の贋物ありやなしや。試に金章輝く貴人の胸にも、破れたる温袍に、一片の俠骨を包むといふなる、有志家の心にも、一寸お尋申て見たし。

史傳

臨終の母ウラード（上）

死の床は最後の戰塲なり。此所ろに於て怖れず、わろびれず、騷々しからず、嚴そかに且つ眞面目にして、末期の態の宜しきを得るを、最後最大の勝利となす。此故に偉人の臨終は、大ひなる教を與ふ、吾等其の示す所ろを謹んで聞かずんばある可らず。今ま、前號の社說に於て弔意を表し置たる母ウイラードの末期の狀を記さんとす蓋し彼人の傳記とせば此事に優りたるは尠かるべし。

古往今來、歷史に名を止めし偉人の臨終を見ろに、未だマダムウ井ラードの如く麗しきものあらず。實に其一生の經歷に、ふさはしき者か、夫人身軀潤大、擧止溫雅、音聲深嚴、生れてより長き年月、自らも期せざりし聲譽を身に纏ひつゝ今や天堂に入ろ、左れど誰とて其臨終の斯くまで麗しからんとは夢にも思はざりし事にて、入相の日の遠く山の端に照り渡りて、一段の光彩を副へたるが如くなりき。

此の二年が程は夫人の健康漸く失せ來りしかど、尚五感の一も欠けたる處なかりき。今より十ケ月の前、頓に食慾を失ひ一層の衰弱を招き、此の春に至りては、只其の意志の力にて支へたりと云ふべき程になり、夏に入りて以來、衰弱益々甚しく「吾が室より集りの室まで行くにさへ勞れて途に休みたく思へり」と自ら言ひし事さへありき。夫人が最後に家族の席に列せしは、七月廿一日マンナ、ゴルドンの誕生日を祝せし節なり、去年の此の日全ド祝筵を開きし時は、彼の若きヨラント、エミス等が先づ祝の言を發せしものなるに、今は此の家の尤も若き者と尤も老ひたるものとが、前後相繼きて、天の住家に移る事となりしぞ、いぶかしき。

左に掲ぐるは、ウ井ラード孃が詳細に母の臨終の樣を手記して、「ユニオン、シグナル」雜誌に登載せしものなり。

吾が母の終焉の記　ウイラード女史　手記

わが母の壯健にていませし日には、二人樂しく語らひたる此の室に、今は一人さびしく坐りて亡き母の終焉の記を書き綴る事となりしぞ悲しき。

元と我が家は長壽者の血統にて、祖先の內には八十の齡を越せしもの少なからざれども、殊に母は健康なる一生を送り給へり。母が八十四歲の節、シカゴに於ける婦人矯風會の大會に赴きし時も、朝九時より夕に至るまで、無數の婦人が與へし無比の歡迎と、百を以て數ふる人々の應接に一々會釋して全日少しも變りし處も見へざりし事もありき。此の老年に及びて只自由ならぬは、步行の確ならぬ事のみなりと言ひ給へり。四年前、四週間程、病の床に伏し給ひしが、夫より後は舊の健康に復さず、元來母の身躰は春に至れば兎角勝れざる風なりしが、此の春に至りては殊に衰へたる樣なりき、衆より負けぬ氣の母なれば、朝は誰よりも先に起き出でゝ、門口の戶を開け給へり、其音はわが家の內に響く最初の音なり、斯くて母は六七時の頃新聞紙を見終り、朝飯の坐にては早や其內に在りし事を話し給へり。此の頃よりいたく食事に困難を感ずと言ひ給ひぬ。世を去り給ふ二週間程前、母とわれと二人にて話しける時、母は語り玉へりわれは近頃そなたを生みし前の時の如き感を持てり、「吾れ其時の心痛を記臆す、今實に其時の如くなり、抑も死ぬと云ふは生ると云ふの異名のみ、今われ樂しき天國に行かんとす、われ新しく生れて其國に行くまでは分娩の苦を受くと、いと眞實に又熱心に述べ給へり、われは此の言を聞き驚きて「母上よ夫は吾等の知る處に非ず、神は何時、誰

れの上に來り給ふや知るべきに非ず、母上は今の言の如く考へ給ふなれば、われはいたく悲む」と言ひしが母は答へて「われ好く知れり、汝此の事の近くにあるを見るべし、食は只躰の機關を運轉するもの、而してわが器械は既に用にたへず、今は只何時まで此の世に躰を止め得べきやとの問題あるのみ、われは今に至るまで長き幸なる一生を送りぬ、今はわが去るに尤も好き時と思ふ、われ是れまで汝の事業を助けて敢て妨げたりとは信ぜず、されど是れより後永らへなば終に汝を妨ぐる事の起らじとも限られず、是れぞ今わが去るに己の爲め汝の爲め尤も好き時なりと云ふ理なり」と言ひ給ひけり。

病の床に伏し給ふ數日前の朝、例に依りて共もに語らふ節、母は次のことを云ひ給へり。「實にヘンリー、ソマセット孃は來りて電氣燈の如く世を照したり、われは信ず神はわれ等母子を其事業との爲めに斯かる人を下し給ひて、人世の太陰となし給ひたるなりと、之を思へばわれも心安すく世を去り得べしわれ屢々思へり、われ去らば汝獨り暮さゞる可からざれば尙暫時此の世に止まるべきかと、左れど今は其の心殘りもなく去り得べし、夫はヘンリー孃ありて吾が與へ得ざる力を汝に與へ又わが汝に注ぎし愛と同情とを汝に注ぐべし、又家に於てはアンナあり、われはアンナと汝とは異身にして同心なりと思へり、此の後も二人樂しく過さばさびしき事もあらざるべし。われらが期せし大改革に從事する人としてはヘンリー孃に如くものなし、孃は思も心も意も汝と同じければなり、斯くの如きは只望みて得らるゝ事ならじ、只大能の神の御心にて爲し給ひしのみ」と。

七月二十三日―にはアンナに命じて己が入齒を取り外さしめ、われは早や食も口にする事なければ、斯るものゝ用なし、只來るべき日を待つのみ」とて、僅に收めしめたり。斯くて病氣も重くなりしが母は尙安樂椅子或は床に橫たはり樂しくいと滿足に日を送りたり、われ等の家族の集會は必ず母の居給ふ部屋にて爲す事とせり、其度毎に母は聖經の中なる句を繰り返して稱へては勸めをなし又其愛誦せしと云ふ歌。

I'm Pilgrim and I'm a Stranger,
I can tarry, I can tarry but a right

或は

There are lonely hearts to cherish

などの句を誦して無上に喜び給へり。

七月十六日―は母が識るゝ如く、一生の中に於て今日始めて自ら醫師を迎へたりと言ひつゝ醫師ブラッグトン氏を迎へたるの日なり。是より一週間程前われ母と二人にて園に咲ける草花や涼亭などを眺め居たる節、母は左の句を思ひ出せりとて

His purposes shall ripen fast,
Unfolding every hour;
The bud may have a bitter taste,
But sweet shall be the flower.

其意は

御神の心は速かに　時と共にぞ顯はるゝ
固き蕾は味なくも　やがて咲くべき花は麗し

と吟じ「わが一生の經歷は此の句の如し、われは今わが行くべき故郷に近づき居れり」と言ひ給へり。

病漸々危篤なり

七月廿四日―に至りて赤痢の兆候を顯し、病は益々惡しかりしが母は變る事なく「神はわれをして苦なく生を終らしめ給ふなり」と云ひ尙家族の事、孫娘カセラインの音樂合奏の事まで言ひて樂みたり。始めの程はアンナと吾とにて看護をなせしが、是より二日前、看病婦を招けり、此の時われ等母は危しと見しかば、家族朋友一同相集り、猶速記者を雇ひて密かに母の言を記さしめたり。此の夜母はわれを呼びて、己が葬るべき墓地は、確かに汝の側なるべき順序ならずやと問ひ給ひしかば、われは「然り吾が父の墓と妹の墓との間にある餘地こそわれ等二人の場所なり」と答へしかば、滿足の樣子にて眠に就き給へり。

七月廿五日―には益々衰へたる樣なりしかど、痛みもなく熱もなく、思想は亂れず、麗しき事例の如し。此の日われは母の七人の兄弟姉妹などの事を物語り、母上の其人々に遙に立ち勝りて幸にありし事、及びわが家族のものゝ虛弱なるに引きかへて、母上は幼少の項より健康なりし事など語りければ、母も其齡に幸なりし事を喜びたり。

七月廿九日―母、アンナに言ひ給へり、「わがフランクに先立つは幸なる事なり、若しフランクにしてわれに先立たば、此の世の光は凡て滅するやも計られず、されど幸にして去る者はわれなれば、世は猶光の內に在るを得るなり」と。

七月三十日―われは言へり「母上にして若し斯く麗しく樂しげに居まさゞれば、此の家は喪服を衣たるものゝ如くなるべきに、左はなくて、少しも苦しみを感じ給ふ樣なければ、吾等も共に慰み居れり」と、母は答へて「神は過ぎにし時の如く今も此處に居給へば、われら樂しく居らで何とせん」と云ひ給ぬ。

七月卅一日―われ言へり「母上は性來何も恐れ給はず、常に言ひ給ひけるには、若し盜人にても來らば、直ちに追ひ捕へんと、又常に死を恐れずと言ひ給ひしが其の如く今も恐れ給ふ樣なく、われ等如きものさへ、死の恐るべきものならざるを知り、又此の頃晝も夜もかし付きまいらする時、誠に平和にして、暖き日に照らされ居るが如き心地す」と、母は良くわが事を知りたれば、微笑て「夫は人の性質に依るものにて、恐るも、恐れざるもあり、其の深き理はわが知る所に非ず」と。

八月一日―われ母に醫師の言に從ひ、藥を用ひて一日も永く生を延ぶる樣なして

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

は如何にと問ひたれど、母は終に肯ひ玉はざりき。

家族を思ひ友を愛する情切なり

八月二日―此の日午後既に危く見へしが、猶かすかに命を保ちたり、五時の頃、われ母に向ひて「母上のお顏を見まいらせ猶一生の事ども、思ひ廻らせば、彼の獨逸の詩人シルレルが世を去らんとせし節、人の問に答へて「徐かに、いよ〱徐かに」と言ひしを思ひ出せりと」言ひしに、母は「夫は甚だ眞し、左もありしならん」と答へぬ、次でアンナ、ゴルドンは言へり「夫人いまさずば、此の家はホームの如くあらざるへし」と、母は答へり「其の事に付きては屢々フランクに告げたり、此の家を樂しくするは、我の外多くのものあるべし、われ行けばとて、凡ての樂を取り去るには非ずと。次には醫師と談じ、又ケート、ジヤクソンに向ひて言へり「神は好き節に君をわれ等に遣し給へり、永き間互に神の惠を受けし事よ」と、斯くて再びアンナに向ひて言へり「わが汝を思ふの情は、今言に盡されず、汝の如く眞く親切になし呉れたる者は他にあらず」と、此の時、われは母を扇ぎ居たりしが母は次でわれに言ひ給へり「今少し強く扇ぎてよ、今は此の冷しき風こそ何よりの好物となりしぞ嬉しき」と。暫時にして日暮れとなりしが、われ言へり「母上よ、過ぎし頃、毎夜母上とメリーとわれと三人にて互に道を語りし事を記臆し給ふや、われは今も夫を話したく思ふ」と母は頷きぬ、われ又「母上は善き事のみわれに爲し給へり」と言へば、母も「汝もわれに善き事のみなせり、汝は常に好くわれを慰めたり、われは汝がわれに爲せし如く、汝に爲す能はざりき」と言ふや、アンナは傍より言へり「夫人は誰にも只善き事のみの外爲し給はざりき」と、母は又「われ若し善き事を爲せしならば、夫は神のわれに與へし、自然の性情によりて爲せしなり」なんど語りて此の日も過ぎぬ。

八月三日―母は眼を開きて言ふ「われ空に數多の光り輝く星を見ると、後に至りて又言ふ樣、「今珍らしき服を衣たる者を見たり」と、われ夫はメリーを見しならずやと問ひたれば、否メリーならず、美しき靈界のものなりと、われ天の使の事を知りたく思ひたれば、切に其見しと云ふ者の樣を聞かんとせしが、母は終に言はず只「夫は正しく神より遣はされたるものにて、後の世の樣を示されしならん、とのみ言ひて、又眠に就けり。

十二時の鐘の鳴り響くや、母は彼の矯風會の祈禱の時を思ひ出せしと見へ、「アヽわれ全世界に向ひて祝福を述べたしと言ひ又「總會議、此れにて一年の事業を定むるなり」と口ずさみしが、此は恐く、白標倶樂部の事を思ふの餘り、口に出でしならん。午後に至りては餘程疲勞せしもの丶如く、眼を閉ぢ、屢々大息せしかば、われは苦痛如何にと問ひしかど、母は只少しの感覺あるのみとて、われ等の心を惱させざらん爲め、苦痛とは言はざりき、斯く此の時に至るも母の心は少しも亂れし處なかりき、此の外少しの談話ありて、又ホイッチア氏の姉よりの書狀を讀み聞かせラスクル夫人も來りて少しく談しなどして此の日も暮れぬ。

病急にして倚注意周到なり

八月四日―朝われ聖書を取りて、母の白き手の上に置けり、母は「オー此れ又汝の實なり」と言へり、夫よりロングフエローの死の歌、ウオールズウオルスの靈魂不死の歌など誦して後、われに言へり「わが家にては喪服を着くる事を爲さゞりき、父の眠り給ひし時にも爲さゞりし如く、わが眠りし後も着くべからず、葬式の節の花は無益のものなれば、決して夫を用ゆべからず、昨日見し天の使の風こそわがあるべき風なるべし」と、母は猶話を轉じ「彼の小さき財布に二弗半程入りたるを孫のメミーに送れよ、夫は祖母が八十七歳の時、白標倶樂部よりさる事に依りて、もらひたるものなりと傳へてよ」と、此の時母の顏を見るに、益々勇氣と溫和と信仰の篤き樣面に顯れたり。此の日ヘンリー孃より電報達し、又書狀も來りて母に接吻する樣にとの事なれば、其由話して接吻し、倚其言傳を告げたれば、母は大ひに喜びたり、又メリー、ウ井ラード夫人に電報を送り、其返事ありしかば、母に聞かせたりしに母の言ふ樣「如何に返事の早き事よ、思へば世は餘り廣きものにはあらず、來るべき世も遠くはあらざるべし、アヽわれ救の泉に渇を醫するを得ん」と。

又言ひ給へり「カースに宜しく傳へてよ、われ其豫想の外に眞く成功せしを謝すウ井ラード堂の獻堂式にはわれに來る樣言居たるが、われは手にて造られざる天堂に入る事なればヘンリー孃はわれに代りて演說をなすべし」と後暫時にして、又言ひ給へり「嗚呼われは幸なるものなりき、われ一生に少しも不滿足なる處なかりき、われ世に在りて自然と人生とに神の大御心を悟れり、われ小供等に完全なる教育を施さんとして今や成功せり、又我の家を美しきホームたらしめんと力めしが、徐々として期せし如くなりぬ、此れ等を思へばわれは世に在りて、尤も幸なる者なりき」と。

此の數日、即ち八月、三、四、五、六の日は、殊に記臆すべき日にして、われ等は弟子等が基督に對するが如く、日となく夜となく、力を盡して母を看護し、節々は歌など歌ひて慰めたり。此の時母は既に食物は素より、藥さへも一切用ひ給はざりき。

（未完）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文藝

案山子の舍咏歌草

琴　江間

〻世の中のうきに（さに）ぞこゝろつくし（な）琴合す（ぬ）しらべも（の）亂かちなる

夏草　市村

〻夏草（八重も）のしげれる（ぐら）庵（宿）は秋風のたつ（たゝぬ先より）とはなしに虫の音ぞする

夏月　高原

〻草川の音なつかしき夕まぐれ夏のゝ末をのぼる月かな

北里

風そよぐ靑葉がくれの月かげはくまなきよりも凉しかり鳧

蓮　江間

〻月かげは（はちす）葉ごとのつゆに（のしら玉月てり）見え初めて夕かぜかほる（な）庭の蓮池（すゝしさ）

東京社中の詠草を見て（附詠草をむさしのゝ月と名く）　北里

〻夕月（朝つく日）のかげこそ匂へ（ふも）言の葉のさきみだれたる（ゆかしい千草の）花のはやしに（むさしのゝ原）

評花の林では櫻の事となるべし此處さまざまの草花のかた宜しそは草稿なれば也又東京社の心なし

眞友に送る歌とて或人に乞はれければ　同

〻名のみにていつはり多き世の中に君は眞の友にぞありける（のあるが嬉しさ）

評かく君はなど其人に向ひムキダシにいふはゆかしからず

批評

○萩花集説

理學博士伊藤錦巢先生の孫女、順子が編輯にて、近頃ろ、萩花集説と云へる一小冊子成りぬ。今古の書籍及び代々の撰集中より、萩に關はりたる說を集め、考證頗ぶる廣く且つ確かなり。編輯の躰も、調査の方も、出版の時期も、共に皆な宜し。

○楠公の夫人

楠公の夫人は、万里小路宣房卿の女なる事、楠公に嫁がれしは正中元年の頃にて、當時後醍醐帝は北條氏を誅し玉はんとの御謀あり無禮講と稱して、公卿と將士と打解け互ひに相交はりしとあり、其比、公卿の女を有爲の武家に嫁せしめんとて扨は此の婚嫁ありしならんと云ふの新說、學士會院に於ける細川潤二郎氏の演說大意として、去三日の「日本」新聞に見ゆ。

○立身成切秘决

當世世界の金満家ロスチャイルド氏は、其の銀行に一則の戒を張置くなり、其旬に云く、酒を味はふとなかれ、手をつくる勿れ、賭る〻と勿れと。是れ其立身成功の一秘决なりとぞ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

摘要

犯罪上男子と婦人との比較

婦人は男子に比して罪を犯す事多きや、或は少きやとは、心理學者の屢々考究せし處たり。素より何れの國に至りても婦人の犯罪者が男子に比して少きを見れは、此の問題に答ふるは誠に容易なるが如し、例へば、獨逸は男子百に對し婦人十九、佛國と英國とは仝しく百に對して二十、澳國は百に對する十四、八なりと。然らは各國風俗と法律とを異にすれは此の統計を以て、確乎たる結論を爲す能はさるも、兎に角、婦人の方遙かに男子の下に在りとは事實なるか如し。此處に於てか、婦人の道德的觀念は男子より高尚なるものなりやとの、新問題を呼び起すなり、之れ即ち心理學者か永く研究せる處たり、近頃ルードッ井ヒ、フルド氏の如きは明に然らすと答ふ、氏曰く、婦人の務たる主として家事を治むるに在るなり、故に一國の政事に關係する事少く、罪に陷いる誘惑を受る事少く、又其腕力は薄弱なり、此れ等は其の罪科を犯さゞる主要なる原因なるへし。左らは社會の狀態か婦人に適せさるに至り、衣食の爲めに勞力し、男子と競爭するに至らは、終に其犯罪者の數は增加して男子と大差なきに至らんと。

氏は尙進んて論して曰く、婦人は生存競爭に適せさる者なり其力は諸般の誘惑に勝ち、危難に堪る事能はさるへし、故に若し婦人にして男子と同樣なる位置に在らんか、其犯罪の數は必ずや男子に超過するに至るへし。凡そ婦人は一旦墮落するや漸々罪惡の深淵に陷落し終に救ふ可からさるに至るものなり、其の斯の如き者にして正道に復せる者の極めて少きは爭ふ可からさるか如し。而して又犯罪に至りても其統計上よりすれは男子の下に在れとも、此れ等の問題を決せんとせは、其の犯罪の性質をも詳かにせさる可からす、獨逸の統計に依るに婦人の犯罪は重もに個人と財產とに關する事にして、國政及ひ公事に關する事少く、其罪科は恐るへき事のみにして、殊に人の生命に關する事件の如きは、婦人の方却て男子に比して多き事あり、是れ等は大低、小兒の虐殺、或は親族の關係より生するものなり。

斯くの如く觀察して論するは、婦人は男子に比して他愛心の深きものなりとの謬見を排するに足るへし、是れ統計と歷史とを詳かにせさるの論にして、兩者の證する處は即ち婦人の男子に比して情の少き事と罪科を恐れさるの性質ある事となり、彼の佛國革命の時、巴里同盟の時に於ける事實は之を證して余りあり、虐殺を行ふに於て情を動かす冷淡にして罪跡を蔽ふに巧なる、行跡を僞るの妙なる凡て婦人の男子に勝る處にして、實に男子は犯罪に於て婦人の如く毒惡たる能はさるなりと。

時事

○孤兒院流行

獻身の事業と云へば、孤兒院の事業のみと思ひ做し、世の人に獻身者として持て囃やされんが爲めには、孤兒院の事業に身を投ずるに若かずなど、案ずる族の近頃折々現はれ出づるぞ遺恨なる。何事にも流行の弊と云ふものあり、驥北の馬の尻に野次馬の附き來るぞ、詮なけれ。神奈川縣の或る孤兒院は、孤兒一人をも置かずして、彼の無名氏許を促がし、金二十圓を獲んとしたり、又大坂の、或孤兒院設立者は、某氏の名をかたりて發企人に加へ、信用を博せんとせり、而して某氏が之を憤ふり之を非りたる書狀現に、吾社の手裏に在り。此等は其の尤とも忌わしきもの也。其他、譽れの爲めにするもの、一時の感情の爲にするものも亦之れ有り、今や其數二十の上に超へて、而して眞實に孤兒院設立及維持の神髓に適ふもの幾干ありや。天、斷じて此等の僞善を許し玉ふ可からず。遠からざるうち、僞はりのものは悉とく廢り、眞のもの耳長久に生存せん。此に於てか、眞の至誠者の價値いよ〳〵明

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

けしと云ふ可し。

○孤女學院と監督ウイリアムス

監督ウイリアムスは。宗敎界の隱君子なり、吾黨深く之を崇重す。彼人、過る頃ろ、一場の說敎を孤女學院の爲に催し、大須賀兄の至誠至眞を發表して、大ひに聽衆を動かしたるが、其后更に同樣の勸めを爲し、來る第三日曜日には、特に同院の爲に、義捐金を募集せらると云ふ。吾黨は因みに、此の崇重す可き監督の事を記さゞる可らず。監督は年々、其給料を貯畜してあらゆる善事美事の爲に使ひ、身は日蔭町にて買ひたる洋服を着し、コックの言ふ所によれば月八圓內外の賄ひにて食し、其余は一切義捐せらる。彼の巍々たる洋館の會堂も、此度び出來し立敎大學の會館も、築地の救育院も、大抵は、監督の此の貯蓄より成れりと云ふ。監督は此の記載を見て寧しろ喜こび玉はざる可し、左れど、監督が大須賀兄を露し玉ふ如く、吾黨は亦た監督を露はさゞる可らず。これ皆な他人の益となるとにてあれば也。

○女學復興

昨年夏の頃より、稍や登り途となり、今年春とありて、一陽來復、盛氣再回の姿となりぬなど、折々注意したる女子敎育のありさまは、夏休后となりて、一層の好景氣なるが如し。殊に關西地方に於ては、女學再たび勃興の躰にて、新に女學校に入る女生尠からず。東京にても、其兆既に滿分、現に入學生續々たる所もありと聞ゆ。

○伏　姬

長崎の邊りにて、忌はしき風聞連りなり。此時に當りて、吾社の透谷子、前週の白表雜誌にて、富山洞の伏姬を題とし、處女の純潔と云ふとを論ず、思へらく、處女に對する馬琴の理想は、伏姬に於て絕頂に達せり、此の處女の摸型は恐らく、亦た東洋に於ての第一ならんと。かゝる主旨にて此の論あり。濁評、毒氣の風の如く、無作法至極なる折柄、此種の淸音を聞けば、快言ふ可らず。讀者、吾黨が彼の事件を評せざるを怪しむ勿れ、彼事件は、實に論評すべき區域をも超へたり。蓋し沈默を最上とす。

○濠洲に於ける日本婦人

嗚呼如何なれば、如此きぞ。濠洲出稼と稱する日本婦人は、彼地の同胞日本人の爲にすら、追反されんとする也。

寄書

●有志傳道會趣意書

設立者　三澤默二郎

有志傳道會は紳士淑女と稱する上中の社會に福音を傳播するに非らず世の力役社會と云ふ一派の仲間にのみ直接傳道を試みんと欲するものなり、目を擧げて東京市の景況を觀よ年々歳々貧富の懸隔は甚しく彼等貧者の日夜焦思苦心する所は只だ餬口の一途のみ我等と仝しく万物の靈長として世に生れ來れども己が靈性を養ふとを知らず米の價値と酒量の多少を隣人と爭ふて一生を送り妻ある者はホームの和樂を知らず口舌議論を其の常躰と思へり愛と親和の元素なる兒童は之を餓鬼と呼びて絕て教育訓導するとなし否な之を知らざるなり然れば彼の遠く海外に流浪し國躰を傷る賣女及び其他百千の犯罪者は皆な斯かる社會の子女より出現するものなり、府下彼の蘊果して幾萬我れ之を視て愛憐の情禁ずること能はず弘く有志と共に眞理を彼等に傳へ先づ彼等の滅びんとする靈魂を救ひ併せて社會兇惡の根源を絕たんとを欲す仝感の士幸に我が微衷の在る所を察し彼等の友伴となられんとを切望の至りなり

明治廿五年十月

略假規則

一、本會は宗派の異同を問はず何人も入會するとを得
一、本會は總て福音的治療所と氣脈を通じ完全なる働を爲さんとを勉む可し
一、牧師教師より聽聞せしとを教ふ可し
一、便利の教會へ誘導す可し
一、辻待の人力車夫屋臺店の人足等に其話對手となり靜に福音を傳へ又集會所に勸誘す可し
一、定日に一定の會堂又は便宜の場所に集まり共に祈禱す可し
一、福音的治療所の施療患者常に慰問す可し
一、傳道者は必らず一定の職業ある可し
一、傳道者は酒を飲まざる者に限る
一、病人又は其他已むを得ざる者の外物品を與へて傳道す可らず
一、傳道者は宗派の長短神學上議論の善惡及び金錢貸借等を爲す可らず
一、傳道者及び傳道上の取締として適當の內國人を幹事に依賴す可し
一、當分の內一區に一ヶ所宛適當なる信者の家又は會堂を借りて集會所に充つ可し
一、本會傳道者の姓名及び其働きは世上に吹聽せざる可し
一、本會を賛成し物品又は金圓等を寄附せらるゝ時は之を受納し命令の發途に充つ可し
一、本會事務所は麴町區土手三番町二番地愛隣會治療所內に設く
一、總て規則の增減添削は會員多數の贊成を要するものとす

女報

可愛子編

●御救恤金　天皇　皇后兩陛下には三遠の風水害殊の外甚だしかりしよし聞こし召されて、先頃靜岡縣へ御恩賜の御事ありしが此度又た愛知縣へも金五百圓下賜あるべき旨御沙汰あらせられたり。

●行啓　皇太后陛下には、去る八日午前十時御出門濱離宮へ行啓あらせられ、午後二時過き還啓あらせられたり。

●日本婦人會の出品　閣龍世界大博覽會へ日本婦人會の出品物は指名にては織物にて四名、油畫にて三名、繪畫十一名、彫刻二名、計二十名、人撰依賴の分は生糸四名、繭六名、陶器十四名、織物九名、刺繡七名、漆器一名、七寶二名、紋結四名、友禪一名、綴織一名、押繪三名、剪採花三名、レース二名、計五十七名なりと。

●日本婦人會の出品場所　日本婦人會より米國博覽會同婦人會のドガーピル氏に托し、同會出品の爲め婦人舘に向て、千百平方呎の地區を請求せし處、此の程八百二十二方呎即ち我が二十二坪二分餘を交付したる旨同氏より通報ありたり。

●前田令孃の死去　前田正名氏長女今子(九年)は激症腸胃加答兒に罹り、去る二日死去せられり、主人正名氏は其愛孃の訃に接したるも尙ほ有志に演說の約殘れりとて歸らず、夫人は淚を拭ふて其子の衣服、其他一切所持品を、貧民救助に充つることを思ひ立ち、福田會に寄贈せりといふ。

●訃音　青山英和學校教授「ベルナップ」氏夫人は去月廿七日、永眠せられたり、痛惜の至に堪えず。

●婦人慈善會　東京慈惠醫院の會員は、來る十一月十、十一、十二の三日間、鹿鳴館に於て慈善會を開設に付、來月四日より寄贈品の受付其他の事務を同館にて取扱ふよし。

●米國兩孃より東京禁酒會への寄附　先般ソーパー氏が歸米の節、華盛頓府に於て演說の際、日本に於ける禁酒事業の有樣を述べられたれば、其塲にある妙齡僅かに十三歲とも覺しき二人の少孃は、日本に禁酒會のあることを喜び、益々該事業の盛大ならんことを願ひますとて、米金三弗を義捐して同氏に托されたるを以て、氏は之を東京禁酒會に寄送したり、扨米國の靑年が禁酒事業のために能く務むるとは豫て聞及たることなるが、今此一事に就ても誠に其事實たるとを知るに足れり、右に付安藤會長並に福井書記には禁酒會を代表し禮狀を發せられたりと。

●一錢會　は新榮教會の信徒諸氏が發起して家族の集會を開き、集る每に各々一

錢を出し、之を貯金となし、行々は教會の豫備金に充つる目的なる由にて、目下其高殆んど六圓以上に達し、有志者の寄附と合せて四十圓餘りの貯蓄ありといふ。(福音新報)。

●女子技藝奬勵會　在京青森縣人の設置にかゝる女子技藝奬勵會は、全會贊同の篤志者より成立ち、勉て女子の技藝を奬勵し、獨立の生業を得せしめ、兼れて技藝の發達を計るの主趣に出でたるものにて、今回會員募集の爲め同會員なる工藤喜源司氏は、青森に歸りて奔走の勞を採り居れり、尤とも同會は第一着手として技藝學校の生徒に原料を供給し、又た原料なきために修業の念を絕ち居りたる女子に向ふて、其篤志者には原料を與へて修業せしむるものなるよしにて、本部を東京に置き、漸次支部を各地方に設置する見込にて、東京に於ては同縣出身の重なる人々は贊成の上大いに盡力し居るとのことなり。

●內國婦人傳道會社　內國婦人傳道會社は一千八百八十年の創立にして今日に至る僅かに十二年なり、過る一期間（四年間）の集金八十三萬九千百四十一弗七十八仙、其傳道せしはインヂアン（アメリカ土人）の傳道地はインヂアン縣ワシントン縣ニウメキシコ、ユタホ洲等にあり又アラスカ、ロシア、アメリカ、又諸國より米國住民の爲め更らに好結果を得たるはデコンヂスホーム即ち婦人執事の傳道にして、婦女子を教育して之に充つ、病者看護の働きあり、會員中家々を訪問し其の信仰を勸むるあり、或は祈禱會組會の働きを助けて其功用著しく教會を補益せり、此事業の將來に有望なる敢て外國傳道に劣らざるべし。

●外國婦人傳道會社　外國婦人傳道會社は、一千八百六十九年始めてボストンに於て創立せられしより、已に二十三年の星霜を經過し、其成効進步實に著し、千八百八十年に於て本會十二萬七千百七十八人なれども、一千八百九十一年に於ては十四萬四千二百六十四人にして、二萬九千三十六人を增加せり、同會は之を十部に分ち、各部に取締長を設け之を支配せしめ、又年會書記七十一名と連會書記二百七十九名とを有せり、現今宣教地に派遣せる人員百二十八名にして、十七名は歸省休息中なり、現百十一名は派遣地にあり之を細別せず

印度三十一名　日本二十五名　日本支邦五十五名　メキシコ八名　南アメリカ五名　イタリー二名　ボルガリヤ一名　朝鮮四名なり

外國婦人の友と云へる雜誌は、同會の機關雜誌にして當時刊行二萬四百一部なり、

今又其集金報告を閱するに、過る一期間（四年間）（一ヶ年二十万六千三百八弗平均にして）全額九十一萬六千七百九十三弗なり、其前一期間に比すれば二十五万七千八百九十六弗を增加せりと。（以上二件、日本美以教會總代二宮安次郎氏復命報告。護教に見へたり）。

楠公夫人の出所に就て　楠正成朝臣の夫人は、永く烈婦の芳名を傳へ來りしかど、其出所に至りては毫も史乘の徵すべき無く、大日本史等の如きも其出づる所を知らずと記したる程にて、世人が常に遺憾とする所なりしが、此程細川潤次郎氏が學士會院の講談會に於て、伯爵萬里小路家に傳はれる記錄、口碑并に京都の扇商柏原正家が曾て萬里小路家へ申出でたる物語等に徵して、夫人は滋子と稱し實は萬里小路宣房の女、同藤房の妹なるを、上田兵庫頭の養女として楠家に嫁したるなりとの一新說を述べたるより、目下歷史家中にて一の考究問題と爲り居る由、尤も細川氏とても勿論直に正確の遺聞なりとは斷言せずして、唯參考にまで聞見の事柄を述べたるものなれども、頗る據る所ありて、一概に其眞僞如何を定め難きのみならず、當時の事情より推すも強ち是等の事無しとも云ふべからず、兎に角細川氏に據りて斯く考查の端緒を得たるこそ幸なれ、是れよりは他の據證を搜索せんものと、重野安繹氏等は頻りに取調べ居る由なるが先年來各地方を巡回して謄寫し來りたる社寺舊家の古文書等には、未だ是れぞと云ふ證據の事跡を見受けざりしと云へり。

●橫濱聖經女學校の祈禱會　某姉がひとたび確信を得たるより、至るところに其うけし惠みをあかしければ、他の女學生も大に警醒したり、恰もよし長崎より聖靈の恩化をうけし一女生入學せしかば、一層精神振起して彼の三日間祈禱會の如きもその盛んなる事いはんやうなかりしと、この會にて男女六人の受洗者あり、年會以來心靈上の進步と共に會計上も大に整理し、先月のごとき僅かに九錢の不足を生ぜしのみ、

同夜午後七時より日本女子傳道會社の大會をドレパー老婦人、山岸ナツ姉の司會にて開會し、最初に稻垣すゑ姉は起て自己の得たる平和と喜びを述べ、次で女子傳道會社の主意目的を說明し、諸兄姉の入會せられんとを勸められ、其れより相原、本多、齊、ドレパー老婦人の談話あり、相原氏の祝禱を以て午后九時過ぎ閉會せり、此日朝出席者百餘名、夕九十名餘にして非常の盛會なりき、即時に主の名を宣傳するを贊成し、同會社に入會したる者十四名ありしとぞ、次に記す女子傳道會社の社長はドレパー老婦人にして、書記に竹內小なつ姉、會計は津田さと、深澤ふさの兩姉なりと、會費は一週間二錢一年一圓にして、其の主意目的とする所は、傳道師を養生し、又必要の地に傳道師を派遣し、暗きに迷ふ愛する同胞に道を傳ふるにありといふ、既に同會社より青森地方に一人の女傳道者を派遣し居るとのとなりと、護教に見ゆ。

●貞婦賞金を受く　山梨縣東山梨郡勝沼村の小澤かれといふは、八年間病夫の看護を怠らず、其間よく舅姑に事へ、貧困の中より長女みさを學校に通はせる等、克く貞節を盡せしは奇特なりとて、此程山梨縣知事中島錫胤氏より金五圓と賞狀とを贈られたりとぞ。

●山梨縣下に於ける工女の罷工同盟　同縣下甲府に於ては、工女の罷工同盟ありたり、されど其同盟は追々に破れたり。

●紋織會社の出品　西陣紋織會社は米國博覽會へ出品せんとて製造中のもの十種あり、其內重もなる品は繻子地の窓掛にして、一は紺青地に芙蓉と秋海棠の摸樣、巾四尺長五丈の物又一は枝菊の咲きたるを幾個も聯れ、花の色を種類に依て變ぜしめたる太さ手間の入りたるものなり、其他は女洋服地、壁掛、卓子掛等

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にて、目下織立中なり。

●西陣チルの輸出　西陣チルは製造高年々增加せるが、其販路を擴張せざれば終に衰頽を來たさんとて、同地の內藤小二郎氏は、今度清國及露國へ見本數百反を送りたる由。

●大河文庫　淚華女學校に於ては、今度同校の爲め其遺產を寄附されし故大河ぬい子の德を紀念せんとて、大河文庫といへるを設くることとなり、來月三日天長節、同校に於て諸教會の親睦會を開かるゝを期として開庫式を擧行する筈にて、目下專ら奔走中の由、尙此際同文庫の爲め、內外諸有志に書籍の寄附を求めらるゝ由なり。

●西陣織を練習せんとす　京都西陣織職工となり、綿織絹織を練習せしめ職業を起さんとの目的にて、岡山縣備中國阿賀郡の有志者は、十五年以上十七年以下の女工十名を撰みて、不日京都に赴かしむるよし。

●米澤製糸場　米澤製糸場は舊藩主故茂憲公、曾て故大久保公の勸誘に從つて創立せるものといふ、其の始めは資本四萬餘圓なりしのみにて、工場及び器械に費せる所、又二萬五千圓に過ぎざりしと雖も、今は百三十釜の製糸器械ありて、工女百六七十名之に從事す、社長は丸山孝一郎氏なり、工女二列に並坐して或は繭を繰るものもあり、繭を把て糸を曳き出すあり、湯氣場に滿ち、轆轤の聲耳を聾す、實に盛なり、又糸を枠に移すあり、束れるあり、繭を擇ぶあり、又廣大なる養蠶室あり、中に無數の繭を貯ふ、一日器械によつて糸とする繭大凡七石、一ヶ年一千七百五十石に及び、其の輸出する製糸百七十餘梱に上る、重もに同伸會社に由て米國に直輸出するものなり、場內には男女二百名の職工あり、女工は大抵場內に寄宿し、其の熟練せるものは食料の外に手取日給二十一錢を得、始めて入場せる見習工女は、手取月給三十錢乃至五十錢を得、而して場內には雞豚を養ひ、菜蔬を作り、最も男女工の食物に注意す、場の規模は外觀必らずしも壯麗ならず、然れども其の設計宜しきに適ひ、實を擧るを主とせるは深く感賞すべし、現に昨年の純益は一萬圓、今年は二萬五千圓に上る、皆之を積立て、漸次其の規摸を擴張するの資に供すべしといへり。

●婦人の龜鑑　鹿兒嶋縣下薩摩郡永利村に高山某と云ふあり、兩三年以前までは資產も饒かにて、殊に村內にても隨分肩幅の利かれし人なりしが、何か失敗を執りし後は、家產も蕩盡し去り、今日に至りては首も廻らぬ程の借財を拵へしが、袖寒ければ寒き程村內の交際も自然に冷くなり、音なふ者は借金取の人々と云ふ有樣なるに、感心すべきは同人の妻何某にて、少しも苦にせず、斯る味氣なき生活の中にも決して夫に對して苟且なる言行の振舞なく、甲斐〳〵しく立働きて、兒女の養育は更なり、日々の薪炊の勞より食事万端の世話に至るまで、何呉となく細き女の手一つにて其日の烟を立て居るには、村內の誰れ彼を問はず一人として同女の貞節を賞めざるはなし、然るに此頃も夫何某は或債權者より裁判所に訴へられ、財產差押の處分を受けたるに、會ま夫何某は他行して家に在らず、然るに同婦女は種々奔走して債權者に三日間の猶豫を乞ひ、其の期日には拾四五圓に上る金を女の手にて世話し、立派に財權者に相納めたり、故に村內は勿論近村の人々さへ同女の貞節に感心して同女こそ婦女子の龜鑑となりて、賞め唱ふるに至れりと、實に同女の如きは、浮薄なる世に珍らしき人と云ふべし。と鹿兒島新聞に見ゆ。

●明二十四年福井縣下女學の概況　◎小學校女教員は本年師範學校を卒業せし女生十五名、直に教員免許狀を授與して訓導に任用せられぬ、女教員の總數は四十人にして前年より增すこと十四人なり、◎中學校附屬の女子部は、當年通常縣會の議決を經て二十五年度より高等女學校とし、全く中學校より分立することとなれり、女生徒の總數は七十二名なり、◎師範學校女子部は當年三月女生徒卒業の後之を閉ぢたり。

●昨二十四年新潟縣下女學の概況　◎師範學校の女子部は幸にして昨年の火災を免かれたり、女生徒の數は六十八名、前年に比し十六名を增せり、本年の卒業生十二名ありたり◎私立新潟女學校は教員男五人、女五人、內米國婦人二人なり、生徒の數は三十一人◎私立學校に女教員たる者十三名、女生徒は二百九十三名ありとぞ。

●昨二十四年德島縣下女學の概況　◎小學校の女訓導は十名あり前年より一名を增せり◎師範學校女子部は縣會決議の結果を以て當年三月限廢止◎私立學校に於ける女生徒の數は百七十六人あり◎幼稚園は德嶋高等女學校に於て之を設け、幼見保育の科に充てたりしが、該校廢止後共に廢止し今は絕無なり。

●昨二十四年北海道廳女學の概況　◎區立に係る札幌女學校は休校せり◎區立函館女學校は、教員男二人、女七人にして、生徒百七十九人あり◎各種學校の女教員を總ぶれば十四人、女生徒は二百六十四人、卒業女子は十三人なり。

●結婚式に禁酒を勸告するの書　東京禁酒會月報第二十一號には、會長安藤太郎氏が、其友人の結婚の際に寄送せられし同書翰を掲載せり。

●女醫　去廿四日の中央醫事週報第卅九號は、前號にも摘要したる入澤達吉氏の婦女問題中「女醫」の分を全載して、且つ左の如く附記したり。

入澤氏が、女子の大學に入ること及女子の醫學を修むることに就て歐米合國の事實を調査し確實なる報告を與へられたるは余輩の最も多謝する所なり

余輩も亦其擧に倣ひ暫らく自己の意見を發表するを止め爾後、日本女醫現況の調査、今日迄先輩諸氏が公にせられたる女醫論、女子職業論の審査及其批評等を務め、次で自家の意見を公にし江湖識者の叱正を乞んとす

余輩はこれに先だつて尙ほ世の醫學者、教育家社會論者諸君の意見を知らんことを欲す殊に、教育家及今日既に卒業せられたる女醫及女醫學生諸君の意見を聞かんことを希ふ、今日迄女子の職業（女醫論も亦含まる）女醫等に就て論議したるものは悉く世の社會論者、男醫等にして未だ教育家の說を聞きたること無し、殊に女醫及女醫學子にして其說を吐きたるものF.S.氏に對する本多詮子君に止まり其他を知らず、余輩は諸姉が醫學を修めて醫學者となり或は醫師とならむとの志を立てられたる時の決心を聞かんことを希ふ

要するに女醫論は決して醫學者間のみの問題にあらずして寧ろ教育及び社會の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

情況に大關係を有するの問題なり、故に余輩は前數者諸君の所懷を吐露して余輩に告げられんことを望む

女醫論に就き意見ある諸君は之を文にして本社（中央醫事週報社）編輯局に寄せられたし、本社は之を審査し上乘の者を撰び時々週報紙上に掲ぐ可し

既に卒業せられたる女醫諸姉、現今從事し居らるゝ業務の詳細を報道せられむことを乞ふ

●大坂通信

◎浪華女學校の概況　左に相記し申候

（一）本學年（九月）より高等師範學校出身米山さく子を聘して教員並に寄宿舍の取締を囑し純然たる、家族主義を取り、舍内の事は總べて、他人の手を假らず、廊下の拭掃除に至る迄生徒自身に之を爲さしめ、炊事の如きも御菜物の獻立は一切生徒の定むる所に任じて、傍ら家政學の實地練習を爲さしむる等、從來の積弊に鑑み家庭と學校との關係を隔絶せざることに最も注意す。

（二）以前は傳道會と稱して寄宿生の中信徒のみを以て組織して、專ら傳道上のために編物等の働きを爲し、若干づゝの收入を得るの方法ありしが、此度組織の區域を擴め本校生徒全躰より成る會として、各身に應ずる働きを爲して洗濯、毛糸細工、レース編――其收入を以て、慈善傳道抔一般公共の事に使用することに定め、各皆喜で其働を取り居れり、目下既に數圓の金を得たり。

（三）嘗て本校生徒たりし堺市戎の町大河ぬい子は去る日病死せられしが其遺言により整理公債證書百圓券を遺族より寄附せられたり實に世の子女たる者の鑑みるべき事にして本校に於ては永遠に其遺志を保續せんため本校の基本金として蓄積し置くの計畫を爲せり。

（四）本學年に於て十數名の入學者あり、尙追々申込あり外國教師は目下壹名なれども、本月末には今一名米國より來朝の筈、左すれば英文學に於ては充分發達を計ることを得べし。

●神戸通信

◎女子夏期學校　九月廿四日より二週間、神戸女子神學校に於て女子夏期學校を開く、生徒は嘗て神學校に於て螢雪の勞を卒へ實地傳道に從事せらるゝ姉妹にして、東は上洲地方より西は九洲地方の如き遼隔なるも厭はず、幾多の經驗と滿腔の喜悅を以て來會せらるゝ者十余名、而して講師と演題とを左に掲ぐ、

一聖靈　川本政之助君
一基督　本間重慶君
一傳道上の心得　濱手文太郎君
一基督教と婦人　望月興三郎君
一祈禱、祈禱會、少年傳道、　長田時行君
一創世記に就て　宮川經輝君
一詩篇　ダッレー孃
一舊約史　パロス孃

等にして大に利益を得たり、又來會姉妹の互に實地の上に得たる經驗を語りて意外の好結果を得て閉會せられたり、パロス孃の考へに依れば假令每年と云ふ好都合を得ざるも、二三年每には必ず開會する由なりと聞けり。

●北海道通信

◎函館に於けるウエスト孃　九月廿九日札幌より來函、三十日美以教會堂にて矯風上の談話あり、十月一日午后一時より矯風會禁酒會一同共に撮影し、三時より公園內共同館に於て親睦會を開く、會集六七十名、孃の懇篤の勸話あり、午后七時半より劇場蓬萊館に於て禁酒演說會を開く、辨士津田仙氏と仝孃、菊地泉平氏通譯にて滿場立の地なし、翌日曜午前九時より美以教會にて說教、二時より小兒の爲に話され七時半より、仝救會に於て說教せらる（菊地氏通譯）三日午后七時半より日本基督教會堂にて演說せらる、通辨櫻井チカ子）終て十時田子の浦丸にて靑森へ向て出立せらる、連夜何れも滿場にて實に靜聽せり。

●仙臺通信

◎仙臺に於けるウエスト孃　去る七日夜はウエスト、津田兩氏當地仙臺に於て禁酒大演舌會相開きたり、今晩は宮城女學校に第二回文學會紀念會あり、終りて八時より禁酒會員の集會席上にてウエスト孃の特別の演舌ある筈、九日日曜日夜は仙臺教會にて同女の宗教演舌相開き各教會は休みて一日同教會に集會する都合なり又十日月曜日午前は婦人會合相催し、同女の演舌有之都合に御座候、同女は今八日第一列車にて松島見物に出掛け申候。（十月八日發）。

●在外醜業婦女驅逐の運動　在南濠太利クヰンスランド州サースデー島日本有志熊本人佐々木重俊廣島縣人渡邊駿之助、島根縣人野奈美小二郎、大坂府人藤田辰治郎長野縣人松岡好一、三重縣人岡本與之助の諸氏外三十五名には、豫て在外の我邦醜業婦女が我邦の躰面を汚すこと甚しきを慨し、之を驅逐せんことを計畫しつゝありしが、いよ〳〵帝國議會衆議院へは建白書、外務大臣へは請願書を提出することに決したるよし。

●朝鮮國王子義和君の妃　のことに就ては、政府中にも意見を抱ける人多く、諸家爭ふて己れの女を率らんさするより、其撰擇に依り怨を買はんことを恐れて、遂に一時沈領議政を辭職せしめし程の有樣なりしが、爾後も唯右等諸權家の或る一人より女を容るゝ時は、爲めに他の諸權家をして不愉快を抱かしむることのみ恐れて、荏苒今日に至りしが、嬪宮を迎へらるゝ事は右等の都合に依り愈々明年に延ばさるべき由なりしが、其後俄かに撰擇はりしものと見へ、遂に全く諸權家

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

外なる未だ多く有名ならざる徐相瓚てふ進士の女今年十九歳なる者を濵宮に容れらるゝ事に御決定相成り、今年内には御婚儀を擧げらるべしとの噂さあり、左れど有力家中身分低き族輩より王子の嬪宮を容れらるゝとは、或は王室の威光を損する事なきかと主張する人もありと云へば、如何成り行くや未だ知る可らずと。

●獨逸皇女御降誕　獨逸皇后陛下には、去月十四日午前一時三十分ポテスダムの離宮に於て御分娩皇女御降誕あらせ給ひたり、蓋し獨逸兩陛下の御間には是迄皇子のみにして、御皇女は初めてなるよし。

●露國皇后陛下　は御遭難の當時我　皇帝　皇后兩陛下の太子に對し盡させ玉へる御懇誠に深くも感じ入らせられしと見え、近侍の女官に向ひ折々に語り出られて、御感の涙に咽び玉ひ、殊に東洋來往の使臣に對しては必ず仰出でらるゝよし。

●婦人の電信技手　米國に於る婦人の電信技師は三万七千人なれども、漸々增加しつゝありと云ふ。

●博愛の英國婦人、險を冒して西比利亞に癩病者を恤む　妙齡の一孃が、凜冽たる寒風を冒し、幾多の困難危險を排して、馬上西比利亞の探撿をなし、彼の多くの人に見放され、或は殘害せらるゝ癩病者を恤み、恙なく歸り來り、或は著書に或は演說に、救濟の法を講じつゝある、尤も美はしき記事は、去る七日の福音新報と基督教新聞とに見へたり。

●ジョゼフィン、バットレル夫人　廢娼事業に有名なる同夫人は近頃ウィラード孃に書を寄せて、女子に投票權を與ふるの必要を切論し、終に左の言葉あり、
かく申し候中も大都會を往來致し、數千の婦人は道ならぬ生活を致し貧困と無慈悲の爲に嘆かわ數奴隷の身となり果て居候事は實に妹等にとりて永遠の恥辱に候はずや斯くの如きを救助致し候は甚はだ切要にして神聖なる事業には候へども是に勝りて必要と存候は妹等婦人が男子に對するの感化力に御座候、妹等は天より地より有りと有らゆる勢力を召し寄せ、先人が嘗て宇宙間事業の頭領と名づけ候彼の恐る可き社會の大罪惡を排除いたし度决心仕候戰場に於ける扶助は賞む可き事業なきは疑を容れず、只合戰に負傷いたし、兵率の擢けたる手足を捲き候は戰爭なるものを全廢いたし候に如かずと存じ候救助は例へば戰場の看護に比し妹等は一層根本を救わざる可らずと存候云々

●近來歐州に於ける格式ある婦人并に才能あり地位ある米國婦人にして看護の事業に從事せるは眞に賀すべきの至なりジヤッセ府の小兒病院に皇女ヘレン、キウサ、ロンドン病院にレーザ、リーヴストン、ガワ、リノミングトンなる不治者病院はレーズ侯の姪なるオスボーン孃等是類也。

●ウィルラード孃はゴルドン孃を伴ひて英國に渡航さるゝ噂あるは事業上の旅行にはあらで、先頃永眠されしウィルラード孃の母堂病中看護等にていなく疲勞されたる兩人を慰めんとレーザヘンレハソマセットの懇なる招に應ぜらるゝ也と。

問答

山月子

●問。自信自重と傲慢との區別を、判斷するの道如何、敢て教を乞ふ。

（九州、愛峰生）

●答。余嘗て自信の事に就きて論ぜしとあり、今之を記して答となす。

眞正に英雄を愛する者は、單に英雄の肉、形、功、名を愛せず、英雄の裏にありて赫々たる神の光、基督の像を愛す、斯くの如く眞正の自信は、單に從來の經歷、他人の批評等によりて自らを信ぜず、我の中にありて、我を照らし、我が前路を照らす基督の光を信ず、此光以て人を導くべしと信ず、此光以て世を改革すべしと信ず、故に眞正の自信は、謙遜と寛容とを含む、「罪人の中我は首なり」といへる「我いよ〳〵爾曹を愛すればいよ〳〵爾曹に愛せられずされど喜びて爾曹の靈魂の爲に財を費し身を盡すべし」といへるパウロにして、はじめて「もはや我れ自ら生けるに非らず基督我に在りて生けるなり」、「我れ基督に傚ふ如く爾曹我に傚ふべし」との言を發するを得、若し神の前に謙遜に、嬰兒の如く泣き求め祈る者に非ずば、いかで基督の光、我に入らんや。若し人に對して寛容に、よく忍び、よく聽き、反省思慮する者に非ずば、いかで妄信、頑固、驕倨に陷らざらんや、吾人は四面人なき時、我獨り神の前に自信するとを得るの大人物たらんとを望む、人に對し、人に比較して、自らの長を信ずるに止まる小人物となるを望まず。

●問。英語を知らざる青年男女にして、人物傳を讀みたしといふ者あり、如何なる書類が宜しきや。（田舍農夫）。

●答。麴町區三番町南海堂より發兌せる基督のすがた、亞古斯丁。京橋區築地一二三館より發兌せる基督の摸擬。京橋區出雲町警醒社より發兌せる基督傳、耶蘇一代記、保羅之傳、淸教徒記事、アブラハム倫古龍、メレイライオン一代記。京橋區日吉町民友社より發兌せる格朗空、武雷土、格武電。並に本社より發兌せる木村鐙子傳など宜しかるべしと思ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

孤兒之友

當勘子編

仲秋一夜の感
孤女學院の涙

吾人此頃人事の疑問とけやらず、苦悶悲痛堪へがたくして近縣に走れり、漸く人煙に離れ、出て寂々たる曠野に祈禱し、寥々たる樹下に默考す、譴行爰に二晝夜、吾人が所感益々深し。佛者が所謂、觀世音、とは是れ余が時の感なりき。

嗚呼、世の音を觀る、夫我心耳我心目何所に、世上、世外、人界、天界、眞に懇篤の意味合いあるを覺ゆ。此頃我敬愛なる若松女史、偶々孤女學院を訪ひて、痛く胸を挨て歸り給へり。秋風肌を犯して漸く寒し。世の子女等は慈母がものせし、仕立御しの袷あり何の不足を感ぜざるべきも、百聞一見に若ず、子を持し親ぞ知る、一子を擧て之を養育するとの如何に困苦心勞ぞや。然るを產后僅か三週間に出でざる赤兒、或は一歲に足ざる幼女、是等皆乳婆を雇ひ、保姆を賴み。一病去りて又他疾襲ひ來る、夜間各自三回起出て厠に携るなど奔命に勞るゝも尙二便を漏さゝるとなし、人若し來て一夜孤女學院に息ひみたまへよ、其夢如何に驚べきかを。もし信仰なくば之より空漠たる事業なかるべし、明日の需要は何人が用意し何人が供給すべきや。只管ら天惠の無限を賴みて疑はざる也。

至誠と慈愛

苟も孤兒敎育の任に當る者、至誠と慈愛を欠き、いかで祝福の下に永遠に榮へ行かんや。近來孤兒院は一時の流行を追ふの傾きありて、既も識者の說もありたり、當局者大に思慮する所ありたり、然し世には僞善者も亦た多し、一時の人氣意表に出るも、此至聖至善なる事業久しく維持し得べきの理あらんや、只憂ふべきは眞誠なる孤兒院を世人が信ずるの度を減じ、隨て同情の跡なるを遺憾とす。

嗚呼我至誠熱愛なる孤女學院の兄姉等は、人世幾多の煩悶に打ち勝ち、種々の疑問を通過し、信仰により一切を全く天父に委ね奉り、朝暮食薄く辛苦の中に祈禱し、艱難の中に感謝して耐へ忍べり、去月下旬經濟は全く缺乏を告げたるも彼の博愛家ホイトニー君より若干の寄附ありて一時の急を凌ぎたることもありたり、冀ば敬愛なる姉妹方同院の爲に祈り、且つ同情を寄せ給はんことを只管ら希望す。

●孤兒の友取次義捐金第四回報告

金百七拾圓也	第三回寄附高	
金貳圓六拾壹錢	甲府婦人會有志者	北海孤兒院へ寄附
金貳拾五錢	無名氏	孤兒の友準備金の內へ寄附
金貳圓也	赤十字社看護婦有志者	孤女學院へ寄附
金貳拾五錢	大分縣無名氏	同
金五拾錢	新潟縣高橋ひさの氏	同
金壹圓也	東京市無名氏	同
金五拾錢	山口縣富海新藏氏	同
金五拾錢	東京市武林盛一氏	同
金三圓也	無名氏	孤兒の友準備金の內へ寄附
金拾圓也	橫濱市無名氏	孤女學院へ寄附
金三拾錢	千葉縣一婦人	同
金五拾錢	同　無名氏	同
金五拾錢	橫濱市五少年	同

合計金百九拾壹圓九拾壹錢

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

九州孤兒院報告

寄捐金品領收報告　（自八月至九月）

一金二十錢　長崎　沼田則英
一金三十錢　仝　奥村禹太郎
一金二十錢　仝　原正修
一金六十錢　仝　清水山松
一金十錢　三池　江崎新一
一金十錢三厘　熊本　田中肥後太郎
一金五錢三厘　仝　仝献
一金十錢　福岡　無名
一金一圓一錢　長崎　青木津彦取次
一金三十錢　三池　三池婦人會
一金六十錢　仝　無名ノ女子
一金十錢　仝　桐山セツ
一金十錢　福岡　松隈義雄
一金十五錢　仝　澤木正五郎
一金三十二錢　柳川　高畠ミツション
一金二十錢　仙臺　小池鎮造
一金十錢　福岡　澤木正五郎
一金五十錢　久留米　今村高
一金一圓　仝　永田成美
一金五圓　長崎　アーレン、サイモンス
一金四十錢　福岡　澁谷徹十
一金五十錢　東京　小野正親
一金十錢　三池　桐山セツ
一金二圓七錢二厘　九州夏期學校有志者
一金一圓　無名
一金二圓二十六錢　三池　婦人會
一金十五錢　仝　大竹常葉
一金二圓　熊本　田中一郎
一蠶種紙三枚　仝　荒木ナツ
一醬油一升　仝　仝
一喜の音合本　久留米　千磐武雄
一古衣一枚墨一本木筆一本　三池　多賀カ子
一古衣一枚　仝　福井テイ
一小供物古衣六枚　熊本　井上兎毛
一菓子一袋　三池　村井親
一漬物四包　仝　島ツル
一肴一籠　仝　濵武文治
一古衣一枚カード十枚　長崎　遠山靜爾
一額面二枚　三池　村井親
一大豆一包野菜二把／甘薯火カキ菜　三池　榊守衛
一野菜　同　黒田榮
一菓子一包　同　福井テイ
一溫飩及蔘粉菜　同　關弘道
一萬國歷史一册　東京　立花彦五郎
一古ケット一枚古筆十五本／硯三個古衣具一枚　相嶋寅二郎
一餅一箱　三池　小野
一古小供洋服一枚　福岡　衣笠景德
一菓子三包　柳川　菜女
一十誡掛物一軸　熊本　村井

收入金拾九圓七十一錢八厘外ニ三圓六十五錢七厘狀袋賣却代

四月以降　收入金總計金九十三圓二十七錢四厘
同　支出金總計金九十三圓二十七錢四厘

支出報告

明治二十五年自三月至四月支出金十九圓七拾四錢九厘
內
金九圓五十九錢　米支拂代
金四十五錢　書籍代
金五十九錢　郵便ハガキ
金一圓三十錢　借家料
金六十錢三厘　筆紙墨
金二圓五十二錢八厘　孤兒引取旅費
金八十五錢　藥代
金九十五錢八厘　八百屋物
金一圓〇六厘　醬油。油。薪。炭
金一圓十四錢三厘　家具日用品
金七十三錢一厘　雜費

自五月至六月支出金三十一圓三十二錢五厘
內
金九圓二十二錢　米支拂代
金八十六錢　郵便ハガキ
金一圓三十錢　借家料
金三十九錢　筆紙墨
金二圓二十三錢八厘　孤兒引取旅費
金一圓二十七錢二厘　印刷代及雜費
金十九錢　藥代
金二圓十七錢七厘　八百屋物
金七十四錢三厘　油。醬油。薪。炭
金四圓十錢　紙面袋製造用紙及器具代
金二圓〇九錢七厘　器具
金二圓八十錢　蚊帳及蒲團代
金一圓九十二錢五厘　衣服
金二圓一錢三厘　書籍代

自七月至八月支出金二十二圓八十六錢八厘
內
金十一圓九十九錢一厘　米
金五十一錢　郵便
金一圓三十錢　借家料
金一圓三錢　藥代
金二圓八十八錢六厘　八百屋物
金五十九錢五厘　油。醬油。薪。炭
金一圓六十錢　器具
金二圓十五錢　孤兒引取旅費
金八十錢〇六厘　雜費

九月支出金十九圓三十三錢二厘
內
金七圓九十四錢三厘　米支拂
金五十錢　書籍代
金一圓七十九錢三厘　八百屋物
金一圓三十二錢四厘　狀袋用紙
金八十九錢七厘　油。醬油。薪。炭
金六十六錢　郵便
金七十五錢　印刷代
金三十九錢　旅費
金五十七錢五厘　雜費

孤兒九名預兒二名

十月五日

福岡縣三池郡

九州孤兒院

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

透谷子著

蓬萊曲

幽玄を旨としたる戯曲

場を蓬萊山に假り心を死したる戀人に寄せて大に天地の美妙を説き人間の醜悪を罵る、一篇の結構全く幽玄を旨とし、或は神、或は鬼、或は生、或は死、或は龍、或は月、是等の物を馳驅して縦横に深鬱なる悲戀を述作す。題して蓬萊曲といふと雖實は地獄と天堂の間に蹈迷ひたる一想士の感慨を述たる悲壯曲にして、日本評論がドラマチック、ポヱトリーの嚆矢なりと評したるもの即ち是なり。

正價十六錢の所を此度半減して八錢とし以て女學雜誌購讀者の愛顧に酬ふ

(但し別に郵便二錢を申受)

依托賣捌元 女學雜誌社

女學雜誌社出版書

小供のはなし 全

定價金五錢
郵税金貳錢

目次

第壹回 田舎音樂師
第貳回 菫の君
第三回 熊と旅人
第四回 風と日の喧嘩
第五回 ハイ／＼トタヽイマ
第六回 カンとクッドの話
第七回 王にも勝てる人々
第八回 母の愛
第九回 柔順なる娘
第十回 英雄の所業

横山雅男君著

婚姻論

目次

第壹章 總論
第二章 婚姻の定則
第三章 婚姻は人類の天性
第四章 婚姻の効力
第五章 婚姻數は社會の盛衰によりて増減す
第六章 早婚上
第七章 早婚中
第八章 早婚下
第九章 晩婚
第十章 私婚上
十一章 私婚下
十二章 血族婚上
十三章 血族婚下
十四章 濫婚上
十五章 濫婚下
十六章 離婚上
十七章 離婚中
十八章 離婚下
十九章 正婚
二拾章 結婚年齡
廿一章 結婚年齡の差
廿二章 男女共諸法上
廿三章 男女共諸法中
廿四章 男女共諸法下
廿五章 男女互に撰ふ事
廿六章 結婚の境界
廿七章 離婚
廿八章 結論

目次終

洋綴中本 二百三拾九頁
特別賣價 金拾六錢
郵便税 金四錢

東京市麹町區下六番町六番地
女學雜誌社

看護婦派出廣告

看護婦入用の節は御依頼に應じ本會より派出致可申候
但し地方へも差出し申候●貧困者は無給の事

東京本所區森川町壹番地 慈善看護婦會

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

高等女子師範學校長從三位　細川潤次郎君題字
中島知子著　岡田廣鶴女史挿畫

日本の裁縫と女禮

和整優美挿畫凡百餘

全一册實價金四拾六錢

郵稅を要せず半紙摺三百頁餘

此本は世の少女方の是非心得ねばならぬ裁縫の業と禮義の法とを叮嚀親切に談話の如く書き綴りました者で讀めば直に萬の裁縫を覺え其と同時に起居擧動から平素人と交るの禮義作法も自然と悟る工夫に致しました世には裁縫や女禮の本も多くありますが大抵は實用に遠く其計でなく間違の事も載せて一向充にわなりませんそこで此本は色々と工夫して夥多の月日を積み初めて實地に充て箝る樣作り抑糸途の手ほどきなる縫針の法から裁方縫方は勿論道具の扱方迄一々細密の圖を加へて叮嚀に手引し禮義作法も亦優美の繪も挿して親切に敎へ凡て五十日間には女子一通の途を卒業する方法です術其に洩れたる事柄は附錄として卷末に添へましたから師匠に乏き地方の方は此本が良師となり學校で時間の足らぬ少女方には補修の良友ともなり兎も角少女方には極必要です其故女學校や裁縫所などでは賞與品と致すに格別に都合よく是に上越すものはありません論より證據先づ一册をお讀み試み下さいまし

發行所　東京日本橋區箔屋町壹番地　中近堂

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子敎育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校敎育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子敎育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すことゝす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何なか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
女要論……六十四
母學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君內助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版
女學雜誌社發賣

鈴木弘恭大人著　（半紙判日本綴）

再版　增補

文法口授　一名和文獨案內

特別賣價　金拾二錢　郵便稅　金二錢

目録

（一）文と云ものゝ譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯弁に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

東京麴町區下六番町
女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

橫濱貿易新聞の大改良

●新聞定價●

一枚一錢五厘　一ヶ月三十錢　郵税十三錢
三ヶ月一圓廿九錢　半ヶ年二圓五十八錢

●廣告料●

廿二字詰	
一行一回	金十錢
二回以上	金九錢
七回以上	金八錢

去七月十二日より紙面を擴張し**本紙四**商況**附錄四**大小**八頁**の新聞と爲し内外國に於ける**農商工業、貿易事情、海陸運輸金融事情等**一層詳細に報道し精確に論議し**日本實業の良友良保護者**たるの本領を全ふするは勿論**政治、法律、教育、兵制、文學、宗教等**苟も實業に關係せるものは之を論じ之を報じ更に實業者を益すべき優美なる**實業的小說**内外紳士豪商の**逸事**實業上の**問答**内外國に於ける社會人事の**珍事、奇聞**等を網羅し實ある上更に花を添へんとす殊に**橫濱商况**は我貿易新聞の特有にして東京諸新聞かも一日以上迅速且確實に報道すべし故に**實業家は是非見さるべからざる必用的商事新聞**なり

紙上廣告

今や我國商業社會長足の大進歩を以て文明先進諸國の如く將に**廣告利用の時代に際し**賣らんとする者も買はんとする者も皆廣告に依り其仕拂ふ所の廣告料夥多なる者は以て其收入する所も從て多く、廣告の利に依らざるものは日々に衰頽すべし然り而して貿易新聞か**殊に秀でたるは**讀者中洒落や慰みに購讀する者一人もなく何れも皆紳士豪商にして貿易品製造家は勿論全國あらゆる製産家か**必要上より活目熟讀するものなれば**政治新聞や小說新聞の讀者とは大に異なる所あり故に業躰に依り廣告の効力あること**廣大にして**他新聞に優る萬々なりとす大方諸君乞ふ試に一ケ月以上掲載して其僞らざるを驗せ

橫濱南仲通五丁目九十番地

橫濱貿易新聞社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

使徒

保羅之傳 全

松村介石君新著○正價三十錢、上製四十錢、郵稅六錢○三百五十頁○表紙には鮮美なる保羅の肖像をも掲け中には明細なる保羅傳道地の地圖をも加ふ

◉目次 第一章保羅論（上）○全保羅論（下）○第二章保羅の生時○全保羅の生處○第三章保羅の家庭○第四章保羅の名幷身分○第五章保羅の遊學○第六章ガマリエルと保羅○第七章パリサイ宗幷に保羅の苦心○第八章○基督の傳道○第九章使徒の運動○第十章ステパノ○第十一章雜事○第十二章○保羅の悔改○第十三章保羅の退隱○第十四章保羅の神學○罪惡の事○義罰の事○悔改の事○行働に由て義とせられざる事○信仰に由て義とせらるゝ事○救と報の事○自由の事○行爲の事○雜教理○第十五章保羅が傳道の精神○第十六章記者の回顧○第十七章傳道者の年齒○第十八章ダマスコに在る保羅○第十九章○保羅始めてエルサレムに上る○第二十章タルソに在る保羅○第二十一章ペテロとコル子リオ○第二十二章ヒトポとエシオピアの大臣○第二十三章アンテオケ○第二十四章保羅再びエルサレムに上る○第二十五章保羅が第一の傳道旅行○第二十六章クプロ島其他各地傳道○第二十七章エルサレムに於ける大會○第二十八章保羅が第二の傳道旅行○第二十九章保羅歐羅巴に渡る○第三十章ピリピに於ける傳道○第三十一章保羅ピリピを去りてテサロニケに來る○第三十二章保羅アテンスに入る○第三十三章保羅コリントに入る○第三十四章第二傳道の終○第三十五章第三傳道の首途○第三十六章保羅コリント前書を認む○第三十七章保羅第五回エルサレムに上らんとす○第三十八章保羅コリント後書を認む○第卅九章保羅加拉太書を認む○第四十章保羅羅馬書を認む○第四十一章エルサレムに上る途次○第四十二章ヤコブの家に於ける集會○第四十三章保羅の縲絏○第四十四章保羅と議會幷に方伯ペリクス○第四十五章保羅とベストス及アグリッパ王○第四十六章保羅破船に會ふ○第四十七章保羅マルタ島を經て羅馬に入る○第四十八章二年間羅馬に在る保羅○第四十九章保羅ピレモンに書を贈る○第五十章保羅ピリピ敎會に書を贈る○第五十一章新異端の現出○第五十二章保羅コロサイに書を贈る○第五十三章エペソ書○第五十四章保羅無罪放免せらる○第五十五章第一テモテ書○第五十六章テトス書○第五十七章保羅が第二の入牢幷に審判○第五十八章テモテ後書○第五十九章大魂終に此世を去る○第六十章終結○以上

發賣 東京新橋 警醒社書店

賣捌 女學雜誌社

村木經策君著

家政要旨

正價金五錢
郵稅金二錢

本書は明治女學校か「サンマー、スクール」を鎌倉に開きたる際、家政學を、生徒諸孃等に講述せしを筆記したるものにして他日幸福なる「ホーム」を作るの時に至りて益する所なくんばあらず因て共益する所一部少數の人に限るを憾み之を世上一般の姉妹諸孃に擴布せんと欲えて出版を企てたるものなり。

東京麴町區下六番町

女學雜誌社

今回北米合衆國婦女雜誌ユニヲンシグナル主筆記者ウエスト嬢本邦へ來遊アリシニ付同嬢ヲ聘シ禁酒矯風ノ目的ヲ以テ左記ノ所ニ於テ演說會ヲ開ク但シ入場無料

十月十七日午后二時開會	本鄉區春木町	中央會堂
仝十八日午后二時開會	京橋區西紺屋町二十番地	銀坐會館
仝十九日午后二時開會	赤坂榎坂町	靈南坂教會
仝二十日午后六時半開會	本所區緑町二丁目	本所教會
仝二十一日午后六時半開會	京橋區築地明石町十三番館	海岸女學校
仝二十二日午后二時開會	牛込區拂方町	牛込教會
仝廿四日午后二時開會	麻布區鳥居坂	鳥居坂教會
仝廿五日午后六時半開會	麴町中六番町	番町教會
仝廿六日午后二時開會	赤坂區青山北町二丁目	青山教會
仝廿七日午后六時半開會	芝區田村町	芝區教會
仝廿八日午后二時半開會	神田一ツ橋外	帝國大學講義室
仝廿九日午后六時半開會	京橋區築地明石町十一番地	築地教會
仝卅一日午前十時ヨリ午后五時迄送別會 但シ會費ヲ要ス	小石川砲兵工廠內	後樂園

明治廿五年十月十三日

ウエスト嬢歡迎委員

來る廿一日發兌の**女學生第廿八號**には山**中**月子が**秋雜感**を掲載す、平易の文、愛と誠と涙と血の際、信仰修練の男女諸君が一讀あらんとを望む。あり、如今秋氣清爽・天地わけて嚴肅

●一冊四錢郵稅五厘

東京麴町 **女學雜誌社女學生部**

●●廣　告●●

山口縣人 **澁谷つち**

右の者名を求道にかりて出京し**女學雜誌社、孤女學院、愛隣會**等に關係ありと吹聽し、又は所々を徘徊し種々なる布說を致居候へ共、毛頭關係等無之ものに付、念の爲此段廣告致置候也

明治廿五年第八月　女學雜誌社內　**藤井米八郎**

近來所々を徘徊致し**孤女學院**の名義を喋々**路傍演說**など致し又は**寄附金募集**致し居る婦人有之候得共、孤女學院に於ては毛頭關係無之者に付、此段廣告致置候也

明治廿五年九月　女學雜誌社內　**孤兒の友**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

正札引なし

新形
流行

〇はをり紐　品々
〇帯留類　品々
〇時計紐　品々
〇メリヤス　品々

仕右ノ外組糸一切御好ニ應ジ精製
〇御進物等ハ美麗ニ調進仕候

組糸老舗　日本橋區よし町　佐竹勝兵衛

〇御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

新發明品手桶湯わかしの廣告

一個金壹圓三十錢

一家の經濟は細かき所ろに用心して、些細の事を大切にするにあり、古しへより儉約せずして家の富みたる例し曾て有らず。扨て、此の儉約を爲さんには、家の內の用事を成べく簡略にして、無用の手を省き、無用の費を惜しむにあり。儉約は、富を生ずるのみならず、勉强を生じ、人々心はげみて皆々面白くなり、一家相樂しみて春風の心地よきが如くなるものなり。一家の經濟に心を着くるは、家を富まし、家を樂しくし、家を樂園の如きホームト爲すものなり。

此主意を以て、吾社はホームを美しくするとに樣々心を碎き多年、文筆敎育の上よりして之を試ろみたれど、亦以て一家內の實際の改良を促がすとの大切なるを感じ、先づ家具を簡便にして、細君の勞を省き、臺所元の入用を少くするの方法を工夫せんとす。

扨て此度工夫したるは。手桶湯わかしなり。此は手桶の中に湯わかしを入れ、僅かの炭火にて二十分間に之を熱湯にわかすの法とす、器具は至つて簡便なるものにて手桶にても、水がめにても、盥にても、風呂にても皆な用ゆべけれど、冬向き洗濯などに使はんに、手桶に投げ込み置き、二十分にて湧きたるを一杯用ひ、更に第二の手桶に投げ入れて、又の二十分間に更に熱湯を得ば、至極重寶ならんと思ひ付き、假りに「手桶湯わかし」と名づく。

各地方にても配達運輸すべし

東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

北海道一手賣捌　函館末廣町四十九番地　齋藤政七

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉こ次き

第四版

百人一首講義

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生編述

增補訂正　第三版

正價金廿八錢　郵稅四錢

皇后宮御覧

はゝのつとめ

親の巻　妊婦産婦の心得　定價金三十錢(郵稅二錢)
子の巻　育兒法　定價金四十錢(郵稅四錢)

右は我國無双完全無比なりとの好評を博したる日本子母衞生書なり、華族女學校醫科大家産科婦人小兒科病室並に群馬縣高等小學其他の諸學校に於て參考書として用ゐらる、文章は談話體總平假名付にして極めて理解し易し。婦人方への贈物として最上の好品なり

東京下六番町

女學雜誌社

轉居

麴町區下六番町六番地明治女學校内

迎接日

右在寓土曜日午后ヨリ水曜日午后迄
毎火曜日午后三時ヨリ

退養

火曜日夜ヨリ土曜日午前迄ハ王子ニ退養シ事務上ノ來訪ヲ謝絶シ且ツ書信ヲ受ズ命用ノ人ハ下六番町ノ方へ土日月火水五日ノ内ニ御申越ヲ請フ

巖本善治

是迄女學雜誌並に書籍代金巖本善治宛にて御遞送に相成候向きも有之候、右にては帳簿登記上其他に於て不便に御坐候に付何卒以後直に女學雜誌社宛にて爲替御取組御郵送被成下度候

爲換御取組

女學雜誌社發送部

一書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事
一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は届け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

冊數	前金		府外	
十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊(半年)	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

冊數	前金		府外	
六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊(半年)	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊(一年)	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊 金六錢　郵稅 金五厘

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	一回	前金	拾錢
同	三回以上	一	割引
同	六回以上	二	割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增さ定む。

東京市麴町區下六番町六番地

發行所　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

純金平打指環(槌目)又は(無地) 四匁付十五圓五十二錢○三匁付十一圓八十九錢○二匁付八圓二十六錢

廿二金 四匁付十四圓六十四錢○三匁付十一圓二十三錢○二匁付七圓八十二錢

二十金 四匁付十四圓二十錢○三匁付十圓九十錢○二匁付七圓六十錢

十八金 四匁付十二圓○三匁付九圓二十五錢○二匁付六圓五十錢

十四金 四匁付九圓八十錢○三匁付七圓六十錢○二匁付五圓四十錢

九金 四匁付六圓九十四錢○三匁付五圓四十五錢○二匁付三圓九十七錢

認印付は前記の外一圓增し篆刻料は一字一圓

此の外金若しくは白金(プラチナ)地へ寶石寶玉を裝嵌したるもの又は種々の彫刻を施したるもの許多有之候間御來車の上現品御一覧下さるか郵便御注文あれは寶石入若しくは彫刻等の區別を指示し代金御送付あれは其價に相當の品を精撰して調進すへし若し貴意に適さる時は購求當日より時計は卅日他の諸品は一周間以内は(府外は相當の往復日數を加ふべし)凡そ其物品に破損毀傷なきに於ては何時にても需に應して他の物品と交換し又は原價にて買戻し聊かたりとも其爲に手數料若くは割引等を加へさるべし　但し特別の注文又は好みに依りて調製したる物品は此限に非ず其他の手續は弊堂の店則を御參觀あるへし又特に御注文の分は如何なるものにても御好に隨ひて調製すへし

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地●電話番號三百卅三

天賞堂